

博麗霊夢の体で、コスプレ・異物挿入・逆レイプ・輪姦・中出し・生放送を行う変態TSF作品!



女騎士の城



DOJIN  
R18  
成人向け

# もし博麗霊夢になれたら

【俺】「はあ〜……どうしたのかなあ……」

ため息をつきながら歩いている俺は、この街で暮らすしがないフリーターだ。風俗とギャンブルが好きで、気が付いたら消費者金融に数百万の借金をしていた。毎月の返済のためだけに、やる気のないバイトを続けている。

【俺】「宝くじでも当らねえかなあ……」

そして、今日も重労働のバイトを追え、借金の返済に頭を悩ませつつ、帰宅のために深夜の繁華街を歩いていた時だった。

俺の目の前を、赤い服を着た女の子が、凄く速さで駆け抜けていったのだ。

【俺】「な、なんだあの子……こんな時間に……見た感じ、まだ●学生が●校生くらいじゃないか。それにあの格好、『スプレ』か？……それにしても可愛かったな……もしかしたら、そういうお店の子なのかな？」

こんな時間にあんな格好で繁華街を出歩いてる女は、風俗嬢に違いないと思った。

風俗大好きな俺は、せめて名前と勤め先だけでも尋ねたいと思い、その子を追いかけていった。

【俺】「はあっ……はあっ……たしかこっちは……」

女の子はそのまま人気の無い路地裏に入っっていた。

そして路地裏を覗き込んだ俺は、信じられない物を目撃する事になった。

【俺】「ひいつー!!? な、なんだこれはっ!!?」

そこにいたのは、見た事も無い生き物……だった。

それはかいだ事のない悪臭を放ち、悪夢のような黒っぽい玉虫色をしており、臭くて伸縮性のある柱状の触手を、コンクリートのスキマから滲み出していた。

その体は、原形質の小泡でできた不定形の塊であり、体全体から微光を発していた。

【俺】「あっ……あああああっ……」

【少女】「なっ……!!? なんでこんな所に一般人が!?

は、早く逃げなさいッッ!!」

それを見た瞬間、俺はあまりの恐怖に金縛りにあったように体が動かなくなった。

その生き物は、悪臭を放つ無数の触手を俺に伸ばし。

直後、俺の体に強い衝撃が走った。触手が俺の体を買いたからだ。

【少女】「くっ……夢想封印ッッ!!」

少女が手をかざすと、少女の手から強い光が放たれた。

直後、その生き物はこの世の物とは思えない悲鳴を上げ、光に溶け込むように霧散していった。

【少女】「っ……い、急いで処置しないとっ……!!」

駆け寄る少女の手が、俺に触れる前に、俺はその場に倒れこみ、意識を失った。

【俺】「……んっ……あれ？」

【少女】「よかった、気が付いたみたいね」

気絶していた俺を、心配そうな顔で覗き込んでいた少女が、笑顔になった。俺は体を起こしながら、曇った頭を必死に回転させて、何があっただか思い出す。

【俺】「確か俺、化物に襲われて……」

【少女】「そうよ、私があゝの化物と戦ってる所に、

いきなり貴方が出てくるんだもの。びっくりしちゃったわ」

あっけらかんと少女は言う。本当に化物だったのか？ 夢ではなかったのか？

しかし、本当にそうだとしたら、俺の体を貫いたあゝの痛みが残っていないのは不自然だ。

俺は慌てて自分の胸部を手で確認した。

その瞬間、ふにうとした柔らかいものが俺の手にふれた。



【少女】「ちよつと…私の目の前で、あまり触らないでよう…恥ずかしくなって来るじゃない…」  
【俺】「えっ…？ なんだこれっ？ どうなって…？」

俺はまじまじと自分の体を見る。良く見れば小柄になり細くなり、目の前の少女と同じ服を着ている。腰は細く、肌は白く、髪は長くサラサラで、そして胸は柔らかくて大きかった。

【俺】「お、おい…これ一体、どういう…」

【少女】「貴方の体は肺を貫かれてたわ。だから救急車を呼んで運んでもらったの。

恐らく当分は入院確定ね。でもそれだと、貴方が不便でしょ？」

だから、巻き込んでしまったお詫びとして、私の体を模した式神に、貴方の魂を移したの。貴方の体が用意できれば良かったんだけど、良く知った体じゃないと再現できないから…」

少女はあっけらかんと言う。式神？ 魂を移す？ 何言ってるんだこいつ。

でも、実際に俺の体は、目の前の少女と同じなわけで…荒唐無稽な話だが、俺は信じざるを得なかった。



【少女】「信じてもらえたようで何より。さて、それじゃ説明させてもらおうね」

まず、この少女の名前は博麗霊夢と言い、幻想郷という、この世界とは別の世界の巫女をしているらしい。その幻想郷から逃げ出した魔物を追って、この世界に来て戦っている最中、俺を巻き込んでしまった、という事だった。

【霊夢】「次に、その体についてなんだけど…」

今、俺の魂が入っているこの式神は、霊夢が霊力で作り出した物のようだ。

式神とは言え、飯も食う必要があるし、切れば血も出る、何一つ人間とは変わらない体らしい。しかし注意点として、この体の方がいいと心の底から思ってしまうと、

元の体と繋がっている魂の糸が切れてしまい、二度と元の体に戻れなくなってしまいうようだ。つまり、自分の体が死んでしまおうという事だ。俺は死という言葉に思わず身震いした。



【霊夢】「それじゃあ、くれぐれも気をつけてね。私は魔物退治のためにもう行かなくちゃいけないから」  
【俺】「あ、ああっ…」

そう言うって、霊夢は元気に駆け出して行った。  
俺は夜明け前の薄暗い空を眺めながら、今後の事をボーンと考えた。

【俺】「まさかこんな女子●生みたいな体になるとは…」

俺は無意識に呟いた自分の言葉で、改めて自分が霊夢の体になっている事を思い出した。  
そして股間部分をさわり、自分のペニスが無くなっている事を改めて実感した。  
それを意識した途端、霊夢の体を隅々まで確認したいという欲求が、俺の頭を支配しはじめた。

【俺】「…これがしばらく自分の体になるんだし、ちゃんと確認しとかないとな…」

俺は目の前にあった公園のトイレに入り、トイレにあった大きな鏡に自分の姿を映した。そこにはまぎれもなく、先ほどまで話をしてきた博麗霊夢の姿が映し出されていた。

【俺】「ほ、本当にあの子さっくらになったー」

俺は驚いた後、まじまじと自分の体と顔を眺めた。さっきまでは、信じられない出来事が立て続けに起きていて、じっくり認識できる余裕は無かったが、改めて見ると、この子無茶苦茶可愛いぞ。

【俺】「う、これが今の俺なのかあ…俺の体が、こんな美少女になったのか…」

そして俺は、霊夢の肌を確認するために、スカートと上着に手をかけた。



俺が上着とスカートを脱ぐと、その下にすぐ白い肌が見えた。どうやらこの体、下着を付けていないらしい。

【俺】「うっ、これが霊夢の……いや、俺の裸……」

予想通り真っ白いキメの細かい肌、引き締まったウエスト、張りの良いおっぱい、ピンク色の乳首、毛の生えていない割れ目。どれを取っても、これ以上ない最高の女の子の裸だった。

【俺】「なんだこれっ……エロすぎるだろっ……」

俺はどんどんムラムラして、我慢できれず個室へと駆け込んだ。



俺は霊夢の衣装を抱えてトイレの個室に入り、内側から鍵を閉めた。

【俺】「ぎ、ぎ、これで心置きなく…」

改めて、俺は自分の体を嘗め回すように見た後、その体をじっくり嘗め回すように触れた。

胸の柔らかさ、ピンクで形のいい乳首、

肌のきめ細かさ、頬のぷにぷにさ、

唇のぷるぷるさ、髪の毛のさらさら感、

細くてすらりとした指、綺麗な爪、引き締まったお腹、

太股のはり、靴下の上からでも分かる引き締まった足首、

何もかも、今まで風俗で味わってきた女達とは、段違いのレベルだった。

そして俺はいよいよ、霊夢の一番大事な所、

まだ毛も生えていない幼い割れ目へと指を伸ばしていった。



【俺】「ひんやり〜」

興奮のあまり震える指先で、  
無造作に割れ目に手を伸ばした俺は、  
爪の先を割れ目にひっかけてしまった。  
その瞬間、電気が走るような刺激が、  
下腹部から脳天まで突き抜けていった。

【俺】「い、今の声…俺が出したのか…？」

それにこの感覚…感度良すぎるだろこの体…」

俺は恐る恐る、指をゆっくりと割れ目に合わせて動かしていった。  
敏感すぎる割れ目をこすり上げるたび、我慢しきれず可愛い声漏れしてしまう。  
気持ちいい。女の体って、こんなに気持ちいいものだったのか。



【俺】「はあっ……はあっ……」

じっくり時間をかけて愛撫すると、  
敏感な強い刺激にも体が慣れ始め、  
気持ちよさだけが芯に残り始めた。  
割れ目はゆっくりと濡れていき、  
幼い割れ目がゆっくりと開き始めた。

【俺】「う……あう……♡」

指に付いた愛液をすくって、さらに割れ目を広げるように愛撫する。

俺はさらに奥を愛撫したくなり、処女膜に開いた小さな穴から指を入れて、

奥をゆっくりとかき回していくと、外を愛撫するのは違った気持ちよさを感じた。

俺はもっともっと奥までかき回したい、そう思い始めていた。



【俺】「な、何が入れるものっ…!」

俺がトイレの床を見ると、そこには

1本のポールペンが落ちていた。

トイレの床に落ちていたポールペンなど、

流石に汚いかと思ひ少しためらったが、

どうせこの体は式神で、一時的なものだ。

俺はペンを拾い上げ、割れ目へと突き刺した。

【俺】「あっ♡ これ気持ちいいっ♡!」

膣内部の刺激は、想像していたよりもずっと気持ち良かった。

膣内では大して感じない女が多いと言うが、霊夢の体は中の方がずっと気持ちいい。

俺はポールペンの先端を動かし、夢中になって膣内をかき回していった。



【俺】「んっ……この感触はっ……」

俺がさらに奥へペンを埋没させていくと、ペン先がコロコロした感触の何かに触れ、それ以上押し込む事が出来なくなった。

【俺】「これ、まさか子宮口……？」

俺は子宮口に落書きするかのようだ。

インクの枯れたペン先を、子宮口に押し当てかき回していく。

子宮口がコロコロとペン先で愛撫されると、最高に気持ちがいい。

やっぱり霊夢の体は奥ほど気持ちいいんだ。なら、さらにその奥は……？

俺はさらに子宮口を丁寧に愛撫し、その奥へと繋がる入り口を探した。

すると、ほんの少しペン先がめり込む入り口があったので、ゆっくりとそこへねじ込んでいった。



【俺】「あっ……あああああっ……♡」

ペン先は子宮口を押し広げながら、  
ゆっくりと内部へと突き刺さっていく。  
子宮口を押し広げられる圧迫感、痛み、  
そして快楽に、息も絶え絶えになる。  
でも、こんな美少女の最深部を犯すという、  
そんな背徳的な行為を、止められるはずもない。  
俺はそのまま、力任せにペンをねじ込んだ。

【俺】「ひぎっ……！ ああああああっ……！！」

体の芯を貫かれるような痛みと、強烈な快楽に、俺の脳天は真っ白になった。  
俺は生まれて初めて、女としての絶頂を味わい、情けない悲鳴を上げて体を震わせた。



【俺】「はあっ……はあっ……」

俺はそのまま絶頂の余韻に浸った。

女の絶頂は男の絶頂とは比べ物にならないと、

以前から聞いていたが本当にそうだった。

こんなに気持ちいいなんてするいとすら思う。

【俺】「それにしても……気持ちよかったな♡」

快楽の波が収まった所で、俺は改めて自分の体を見た。

こんな美少女が、こんな薄汚い公衆トイレで裸になって、

落ちていたポールペンを子宮の中に突っ込んで、オナニーしていたのだ。

オナニーの快楽は勿論の事、この背徳的な状況にもツクツクとした興奮を覚えてしまう。

元の肉体に戻るまで、飽きることの無い生活が送れそうだと、俺は期待に胸を膨らませた。





【俺】「……さて、これで大丈夫かな？」

オナニーが終わってスッキリした俺は、再び霊夢の着ていた服を身につけた。女物の服は着た事が無いから少々手間取ったが、多分これで大丈夫だろう。

【俺】「それにしても……この格好……」

冷静になって、改めて霊夢の服装を見てみると、結構恥ずかしい格好だと気付いた。ノーブラで乳首は浮き出て、脇に開いた大きな穴から胸が見えそうになっている。スカートも短く、スリットもあって、ノーパンである事がいつバレるか分からない。こんな格好で外を歩いて、アパートまで帰らなければならぬのか。俺は途端に恥ずかしくなったが、覚悟を決めて公衆トイレから出て行った。



オナニーに耽っていたら、すっかり朝になっただろう。繁華街の通りは通勤サラリーマンでこったがえしていた。そんな人通りの中、こんな服装で歩くなんで、死ぬほど恥ずかしい。でも今の俺は男ではなく、博麗霊夢という美少女なんだと自分に言い聞かせ、恥ずかしさをこらえて、何事も無い様子を装って歩いた。



【通行人】 「なんだあの美少女…コスプレか？」

【通行人】 「うわ、めっちゃ可愛い…アイドル？ 何か撮影とか？」

【通行人】 「すげえ美少女…それにあの服、滅茶苦茶可愛いな…」

周囲からひそひそと話し声が聞こえる。こっそりスマホを向けて撮影する奴までいる。

そりゃ、こんな美少女がこんな格好して歩いてれば、誰だって注目する。俺だってそうする。

俺は顔から火が出るほど恥ずかしかったが、同時に注目を集める事の優越感も味わっていた。

そんな時だった。チャラそうな男が俺に声をかけてきた。

【チャラ男】「ねえねえ、君可愛いね。アイドルとかやってんの？」

【俺】「はあ？俺…私は別にそういうのじゃないです」

【チャラ男】「へえ、じゃあ趣味でそんな服着てるの？」



なんでこんなチャラい男が俺に声をかけてくるんだ？

そういぶかしんだ後、今の俺は博麗霊夢という美少女になっていると思いついた。

とりあえず周囲の人から怪しまれないよう、一人称は私、口調はですます調、

つまり仕事で取引先と話すような言葉遣いに変えて返事をした。

チャラ男はどうでもいい話を繰り返した後、真面目な顔で俺を見てこう言った。

【チャラ男】「ねえ君、グラビアアイドルとかって興味ない？」

【俺】「えっ？ グラビアアイドル？ いやまあ、嫌いじゃないですけど……」  
【チャラ男】「俺、グラビア関係の仕事してるんだよ。カメラマンやったりもしてる。もし興味があったら、詳しい話をしたいんだけど、どうかな？」

このチャラ男、ただのナンパ野郎かと思ったら、まさかのスカウトだった。

【俺】「が、稼げるってどれくらい……？」  
【チャラ男】「興味あるんだ。お金の話になるから、立ち話もなんだし、ちよつとうちの事務所に言って詳しい話をしないか？」

そう言って、チャラ男は俺の肩に手を回し、名刺を胸の谷間に差し込んできた。

その顔には、このガキチヨロいなどという表情が浮かんでいて、それを見た俺はムカムカと腹が立ってきた。そして気付いた瞬間、周囲の景色が反転していた。



【チャラ男】「ひっ!? ああああああつっ!!」

柔道と合気道黒帯の俺は、チャラ男をその場に投げ飛ばしてやった。しかし、この体は思ったより軽く、チャラ男に引っ張られて一緒に転んでしまった。転んだ俺と、痛がっているチャラ男に、周囲の視線が集まる。

【通行人】「うおっ…あの子ノーパンじゃないか!」

【通行人】「すげえっ…パイパンの割れ目が丸見えだ!」

【通行人】「あんな可愛い顔して変態かよっ!」

【俺】「いってっっ… あっ…!!」

周囲の視線と声で、俺は自分がノーパンである事を思い出した。



俺は慌ててその場にしゃがみこんで、スカートを押えた。  
しかし、ノーパンである事を知ってしまった通行人達は、俺に向けてスマホを構えている。  
そして俺は、こんな状況にも関わらず、下腹部が疼き始めているのを感じていた。  
まさか、こんな大勢にノーパンマンに見られて、興奮してしまっているのか？  
俺は慌てて立ち上がり、人混みから抜け出していく。

【チャラ男】「いててっ……いい背負い投げだねっ……慣れ慣れしくして悪かったよ。」

君なら本当に稼げるから、絶対連絡してくれよ……」

そんなめげないチャラ男の言葉を聞きながら、俺はその場を足早に離れた。



【俺】「……やっと帰れた……」

あれから何人もの人にジロジロみられながら、その都度子宮の疼きを感じながら、俺は何とかアパートの自分の部屋へと戻った。

【俺】「美少女も大変なんだな……あんなに注目集めるとは……」

自分の部屋でうずいた下腹部を手で押えながら、俺は自分の体が美少女である事を再認識した。そして、あのチャラ男が言っていた、今の俺なら稼げるという話も、嘘ではないだろう。

確かにこんな美少女なら、少し脱ぐだけで、少し股を開くだけで、大金が転がり込むに違いない。どうせこの体は二時的な物で、博麗霊夢という幻想郷の女の子で、式神という作り物の体なのだ。借金返済のために、文字通り一肌脱いでもらう事にしよう。俺はそのための計画を考え始めた。



【俺】「よし、この方法ならガッツリ稼げそうだな。」

俺が思いついたのは、有料で写真や動画を公開するいわゆるパトロン募集サイトを利用しての金儲けだ。これだけの美少女なら、ちよつときわどい写真や動画で結構な人数のパトロンが集まるはずだ。俺はカメラを三脚に固定し、宣伝用の写真を撮影した。

【俺】「うわ、すげえなこの写真……」

こんな美少女が、ノーパンの割れ目を見せつけながら笑顔で映っている。流石に宣伝画像として投稿する時は修正を入れるが、それにしてもエロすぎる。俺が男だったら、この写真だけで1週間はオナニーできたらうな。





【俺】「さて、何人集まるかな？」

早速パトロンサイトに会員登録し、先ほどの写真をアップロードした。ついでにツイ・ターなどのSNSでも宣伝し、2ちゃん・るなどの巨大掲示板でも貼り付けた。すると、半日程度で一気にフォロワーが増え、パトロンサイトの会員数が、3桁、4桁と膨れ上がっていった。

【俺】「うわっ……すげえ人数……！」

まだ無料会員の方が圧倒的に多いが、彼等のうち半分が有料会員になったとして、一人あたり数百円としても、もう俺のバイトによる給料を超えつつあった。俺は、その金額と、そしてそんな人数に見られている事に興奮し、無意識に割れ目を愛撫していた。



【宅急便】「……、こんばんは。お、お待たせしました。さ、サイン……」とお願ひします」  
【俺】「はいはい、ありがとうございます」

流石はアマ・オン。朝に注文した荷物が、夜になる頃にはもう届いた。  
宅急便の人、受取人がいつもの俺じゃなくて美少女になっていたので面白かった。挙動不審になっていて面白かった。

【俺】「さて、結構人は集まったかな？」

あれから、ニコニコ動画やYouTube等にも登録して、自撮り写真をばら撒いたおかげで、パトロンサイトの会員数は三千人を超えていた。

しかし、まだ無料会員が大半で、ここから有料会員を増やしていかなければならない。そのためには、もっともっと色々な写真や動画をアップしていかなければならない。

俺はそのために、有料会員プラン向けへの生放送を企画していた。

【俺】「さて、放送に必要な荷物や衣装も揃ったし、部屋も片付けてあるし…」

俺はカメラを置いて、少し緊張しながらも、ネット動画の生放送をスタートした。正面に置いてあるパソコンに、生放送の画面と、俺の姿が映し出される。その直後、待ってましたとばかりに視聴者が増え、画面がコメントで埋め尽くされていく。

【俺】「ま、こんばんは…私は博麗霊夢です。生放送初めてですが、よろしくお願いします」

【コメント】「うっわ、すげえ美少女じゃん！あの写真加工じゃなかったのか！」

【コメント】「へえ、こんな可愛い子が生放送なんて、何を見せてくれるんだろ。期待！」

【コメント】「その格好はコスプレ？すげえスカート短いから、綺麗な太股が良く見えてご馳走様です」

次々に書かれるコメントは、全て霊夢の可愛らしさを、俺を賛辞する内容だった。

そしてその裏には、俺に対する男達の性欲も透けて見えて、俺は段々とドキドキし始めていた。

「コメント」 「それで、今から何をするの？ 踊るの？ 歌うの？」

俺が放送を開始して、画面には俺が何をするのか期待する「コメント」で溢れた。俺は深呼吸して少し落ち着いたら、カメラに向けてつけた。

「俺」 「今日、アマゾンで色々な服を買ったんです。」

私の「スフレ」を皆さんに見てもらいたいと思ってます」

「コメント」 「おお〜！ もしかして生着替えー!？」

「コメント」 「もしかして、有料会員になるとHな着替えとか見れるの?」

「コメント」 「もし生着替えしてくれるなら、パトロンになるからね〜!」

「コメント」 がどんどん盛り上がっていく。俺は映りこむ画面に注意しながら、着替えを開始した。

【俺】「それじゃ着替えますね」

俺はたっぷり視聴者を焦らした後、ゆっくりとベッドに座って、スカートに手をかけて下ろしていった。

【コメント】「おおおおおー!!!」

【コメント】「すげえ、スカート脱いだー!」

【コメント】「ほ、パンツは…?」

【コメント】「まさかノーパン…?」

俺は画面に局部が映らないよう、

足とカメラの角度をきちんと調整していた。

一般向け放送という制限もあるのだが、こっぴどく焦らすほど、

見えそうで見えないギリギリを攻めるほど、パトロンサイトの有料会員数が増えるはずだ。



俺は局部が見えないよう、ゆっくろベントから降ろす。  
そのまま四つん這いで荷物の所まで移動した。

【俺】「さて、着替えを取りにいかなきや…」

【コメント】「うおお！ ノーパンだ！」

【コメント】「すげえ綺麗な尻のラインっ…」

【コメント】「ウエスト細すぎだろっ！ 抱きしめてえー」

【コメント】「こっちにお尻向けて！ 割れ目見たい！」

【俺】「ふふっ…見せてもいいですけど、ここは一般向け放送ですから」

【コメント】「えっ？ じゃあ成人向け放送ならお尻見せてくれるのー？」

【コメント】「じゃあ俺あのサイトのパトロンになるよ！ 期待してるよ霊夢ちゃん！」

案の定、尻を向ける、割れ目を見せるという「コメント」が殺到する。

俺は言葉巧みに有料会員プランへと彼等を誘導していく。



俺はそのまま、アマゾンから届いた箱を開け、中から薄い布切れを取り出した。

「俺」「今からこれに着替えま〜す」

「コメント」「競泳水着キターー!」

「コメント」「やべえ、すっげえ似合いそう」

俺は局部が画面に映らないよう注意しながら、競泳水着に足を通し、ゆっくり引き上げる。

女物の水着ってこんなにびっちりしてるんだなど感動しながら、何とかお尻まで引っ張りあげた。

後は乳首が見えないよう、胸を水着に押し込めばオツケだ。



【俺】「着替えが終わりました。どうですか？ 似合いますか？」

それにしても、競泳水着なんて初めて着たけど、

こんなにびっちりしてるんですね。気持ちいいですよ。」

着替えを終えた俺は、カメラに向けて足を広げて座り込んだ。  
競泳水着に包まれた霊夢のエロい体が画面に映し出され、  
そして画面がコメントに埋め尽くされていく。

【コメント】「うっわ、すげえハイレグー！」

【コメント】「ねえ霊夢ちゃん、乳首たってるー！」

【コメント】「もっと足広げて見せてよー！」

俺は期待に応えて、さらに両足を広げて見せ付けてやる事にした。



【俺】「ぶっ……んねっすすすすかっ」

俺は両足を開いて、さらに自分の手でも大きく広げた。小さめの競泳水着は俺の体にピッタリと張り付いて、「コリコリに固くなった乳首を浮き上がらせ、いまだ男を知らない無毛の割れ目に食い込んでいる。

【コメント】「うっわ、すげえポーズwww」

【コメント】「体すごい柔らかいんだね！ 太股おいしそうー！」

【コメント】「割れ目にめっちゃう食い込んで、エロいー！」

【コメント】「マジで裸見たい……というか犯したい……！」

生放送の宣伝効果は抜群のようで、どんどん有料会員が増えていっているようだった。

俺は色んな角度から、たっぷりと競泳水着に包まれた体を見せ付けた。その都度、画面はコメントで埋め尽くされ、俺の他のコスプレ姿や裸が見たいという意見が殺到した。俺はそのたびに、パトロンサイトの有料プランへと彼等を誘導していった。

【俺】「それじゃ、一旦こちらの放送は終了しますね。」

この続きは一般向け放送だと難しいから、パトロンの有料会員枠で放送したいと思います」

俺が放送の終了を告げると、なら有料会員に登録すると言ったコメントが画面を埋め尽くした。これならかなりの収入が期待できそうだ。俺は舌なめずりをして放送を終了した。



【俺】「ふう…緊張した…」

生放送する事も初めてだったし、見られながら着替える事なんか当然初めてだった。中身が男とバレずに済んでよかった。まだドキドキしている。

【俺】「次はいよいよ、ここを見せなきゃな…」

有料会員の数はいなぎのほりに増えている。

彼等が満足する生放送をしないと、折角増えた会員が減ってしまうだろう。

こんな美少女が、不特定多数の男達が見ている生放送で、秘所を見せ付ける。

それを想像するだけで、子宮のあたりがキュンキュンうずく。

俺は興奮でじわりとぬれ始めた股間を意識しつつ、有料会員向けの生放送をスタートした。



【俺】「お待たせしました。今から有料会員向けの生放送を開始いたします」  
【コメント】「待ってました！ 全裸待機してました！」  
【コメント】「金払ってるんだから、それなりのモンを見せてくれるんだろうね？」  
【コメント】「今度はちゃんと見えるように着替えてくれよ」

俺が放送を開始してすぐに、肉欲丸出しのコメントが画面を埋めつくした。そりゃ、あれだけ挑発した後に有料会員に誘導すれば、そうなるに決まってる。ものすごい人数の男達の視線が、この体に乗っかっていると、子宮が疼いて切なくなってる。今すぐにもオナニーしたくなる衝動を抑えながら、俺は放送を継続する。

【俺】「ふふっ…見られてると興奮しちゃいますね♪ それじゃ、次の衣装に着替えたいと思います」

【俺】「それじゃあ、まずは競泳水着を脱ぎたいと思いますっ……」

俺はその場にしゃがんで、とりあえず割れ目は見えないような角度で、競泳水着を脱いでいく。張りの良い、程よい大きさの胸が競泳水着から零れ落ちると、画面が「メント」で埋め尽くされた。

【メント】「うおおおっ！ 生乳首キター……！」

【メント】「うわ、胸の形よすぎだろ！ 乳首もピンク色だし……！」

【メント】「おお？ 霊夢ちゃん乳首立ってね？ つんつんしてるよ……！」

【メント】「ほら、早く下も見せてくれよ……！」

そして俺は靴下を脱ぐために、画面の方へ向けて足を開いた。



【俺】「それじゃ、次は靴下を脱いでいきたいと思います」

俺は両足を大きく広げて、割れ目をカメラに向けてる。

無毛の秘所も、ピンク色の乳首も、アイドルのように可愛い顔も、  
霊夢の全てが画面に映し出され、そして大勢の男達の視線にさらされる。

もう心臓が口から飛び出しそうなほど、心臓はバクバクと脈打ち、  
性欲が脳内全てを支配し、次第に冷静さを失っていくのを感じていた。

【コメント】「うおおおっ！？ 無毛の割れ目だ！！」

【コメント】「可愛い顔してると思ってたけど、女子○生とかなのか？」

【コメント】「現役女子○生が無修正で生放送とかエロすぎ」

【コメント】「ねえねえ、今度は広げて見せてみてよ」

そして興奮していた俺は、その「コメント」の要求に逆らう事が出来なかった。

「俺」「んっ…これでいいかな…?」

俺は近くに置いてあった透明のセロテープを取り、それを割れ目に2枚張りつけ、左右へと引っ張った。割れ目はニチャアと愛液の糸を引きながら左右へ広がり、ピンクの陰唇、処女膜、尿道、クリトリスを画面に映し出した。その直後、再び画面はコメントで埋め尽くされた。

「コメント」「ほ、ホントに広げた!?」「イツマヅン状態か?」

「コメント」「うっわ、綺麗なオマンコ…それにこれって…!」

「コメント」「うわ、ピッチかと思ったら処女がよ!」

「コメント」「処女ピッチとか最高すぎるだろ! 犯してえ!」

「コメント」俺は段々と興奮が高まっていく。



【俺】「はあっ……はあっ……」

俺は霊夢がはいていた靴下を脱ぎ、

次の衣装に着替えるために、

紺のハイソックスに手を伸ばした。

靴下を履きながらも、股間はしっかりと

カメラに向け、ピンクの秘所を見せ付ける。

【コメント】「靴下から着替えるってわかってるね霊夢ちゃん」

【コメント】「裸もエロいけど、着衣もエロいよねー」

【コメント】「次はどんな服に着替えるのかな？ わくわく」

俺が次に着る衣装に期待するコメントが画面を流れる。

俺はそれに応えるため、でも裸をじっくりと見せつけながら、次の衣装を手を取った。





【俺】「ふふっ…どうですか？ 似合いますか？」

俺が取り出したのは、紺色のセーラー服だ。  
近所の○学生や女子○生が着ているような、  
何処にでもあるようなセーラー服だ。  
だからこそ、画面に映し出された俺の姿は、  
本当に実在の女子○生にしか見えなかった。

【コメント】「やっべ…マジで女子○生じゃん！」

【コメント】「セーラー服でノーパンでスカート無しとかエロ過ぎ！」

【コメント】「有料会員になってよかった…マジ抜けるわこれ！」

コメントを見ると、俺の姿をオカズにオナニーし始める奴まで現れ始めたようだ。  
そりゃそうだろう。俺だって画面に映った自分の姿でオナニーしたい。もう我慢の限界だった。



【俺】「ダメッ…もう我慢できな〜ん〜」

こんな美少女の変態動画で、

オナニーを我慢するというのが無理な話だ。

俺は近くからボールペンを手に取って、

濡れた秘所にそっとねじ込み、

「リコリになったクリトリスに指を這わせた。」

【コメント】「うわっ！ オナニーしてるー?」

【コメント】「まさかのオナニー実況中継!」

【コメント】「処女膜のスキマにボールペン刺さってるー!」

【コメント】「霊夢ちゃん変態すぎだろ! いっそもっとやれ!」

俺は自分がオナニーしている動画を見ながら、ボールペンを少しずつ奥へと突き刺して〜ん。



「俺」「んっ…気持ちいいっ…」

俺はボールペンを子宮口に突き刺し、再び両足を開く。そのまま両足を開いて、股間をカメラに見せつけながら、カーペットにペン先をこすりつけるようにしてオナニーをした。これなら、俺にも視聴者にも、霊夢の局部が見えるからだ。

「コメント」「うおっ。まるで床オナじゃん」

「コメント」「すげえ深い所までボールペン刺さってるな」

「コメント」「やべえ、エロ過ぎでしょこんなの…」

「コメント」が少なくなってきた。みんな右手が忙しいのだからと思うと、興奮が高まっている。

目の前の画面には、セーラー服姿の美少女女子○生が、処女の割れ目にボールペンを突っ込んで、床にとすり付けている。しかもそれが今の俺自身であり、こんな美少女に変態行為をさせているのが俺なのだ。それを思うだけで、どんどん興奮が高まっていく。そして…

【俺】「ひっ…あああああっ…」

【メント】「おお、霊夢ちゃんイッたー!? イッてるっ!」

【メント】「めっちゃエロい声だして体痙攣させてる…!」

【メント】「生放送でオナニーしてイクとか…やべえなマンで変態すぎでしょ!」

何回目かの突き上げの後、ペン先が子宮口を抉った瞬間、俺はイッってしまった。

こんな美少女が、ネットで生放送し、太勢の男達に見られながらオナニーし、イッてしまった。それをやらせたのは他でもない俺自身という事実と、自らの体に走る女の快楽が合わさり、俺は表現のしようもない快楽と、征服感のようなものに酔いしれていた。女の体で、見られながらエッチな事をするのは気持ちがいい。俺は自分の脳に、その快楽を刻み込まれた事を認識した。


【俺】「はあっ……はあっ……」

【コメント】「派手なオナニーだったね霊夢ちゃん。気持ちよかった?」

【コメント】「やっべ、これ永久保存版だね。何度でも抜けるわ」

【コメント】「それじゃ、今度は処女喪失生放送だね?」

快楽の余韻も収まらないまま、画面に流れるコメントを見て、俺は再び興奮し始めていた。



俺はイッた体が落ち着いたのを見計らってから、着替えへと戻った。  
最後に残ったスカートをはき、笑顔でめくり上げる。

【霊夢】 「途中で我慢しきれなくてオナニしちやっただけど、  
これでセーラー服への着替えが完了です♪」

【コメント】 「うんうん、似合ってるよ霊夢ちゃん」

【コメント】 「フーパンノーブラセーラー服とか犯罪の匂いしかしらないよね」

【コメント】 「やべえなあ、マジで犯したい!!!」

コメント欄には、処女喪失を見たいという意見と、俺とセックスしたい、犯したいという意見が溢れた。  
俺はそれを見て、その2つを同時に満たしつつ、かつ大金を得る方法を思いついた。



【霊夢】「それじゃ、明日は私の処女喪失を放送しちゃいますよ」  
【コメント】「おおおお！？」 マジで！？」 相手いるの！？」  
【コメント】「俺！俺で処女喪失してくれよ！！」

画面は、俺の相手をしたという男達が名乗りを上げるコメントで埋め尽くされた。

【霊夢】「ふふっ…それじゃ、私の相手は有料会員の中から、オークションで選びたいと思います。  
明日の正午までに、一番高値で落札してくれた人に、処女を差し上げますね」

俺がそう告げると、有料会員達は次々にオークションへと参加していった。

これは面白い事になるだろう。俺は明日の放送と金額を楽しむにしつつ、今日の放送を終了した。

【俺】「しかし…勢いであんな事言ってしまったけど…まさか俺が男とセックスするなんて…」

正直、男相手に犯されるのは気持ち悪いはずなのだが、女の体になっているからなのか、膣と子宮口に、男のペニスを受け入れられる事が、本当に楽しみで仕方なかった。こんな美少女が処女を捨てる相手がどんな相手なのか、その様子を見られる事と、そしてその快楽が味わえると想像するだけで、俺はまたムラムラし始めていた。

【俺】「…もう1回オナニーしてから寝よう…」

俺は火照った体を鎮めてからベッドへともぐりこんだ。





翌朝。

俺は寝ぼけた頭で自分の体を見て少し驚きながら目を覚ました。

【俺】「ふあ…良く寝た…」

…あ、俺今女になってんだ」

この体は本当に健康的で、寝つきもよく、昨日までの疲れがすっかり取れていた。寝る前に体操服に着替えたのが良かったのかもしれない。妙にぴっちりしたブルマと体操服が心地よかった。

【俺】「もうお昼前って所か…そろそろオークションがどうなってるかな？」

俺は体を起こし、ありあわせの朝食を取りながら、ノートパソコンを立ち上げる。

この体の処女を捨てる相手がどんな奴なのか、いくら値がついたのか、ドキドキしながら画面を覗いた。

【俺】「はあああ！？」に、「二百万円ツツツ！？」

俺は自分の目を疑った。まさかの二百万の値が付いていた。キスも無し、抱擁も無し、ただ挿入するだけの性行為に、こんな大金を出す奴がいるとは！美少女霊夢の体恐るべし。これで一気に借金の半分近くが返済できてしまう。俺は興奮しつつ、落札者の詳細を調べた。

年齢はアラフォーの童貞、趣味はアイドルのおっかけらしい。どうやらA・Bに大金をつぎ込んでいる男のようで、

A・BのCDを買う金をオークションに突っ込んだようだ。

そして、生で中出しさせてくれるなら、もう百万上乗せするとの事だった。

俺はどうするか悩んだ結果、その提案を受け入れる事にした。



【俺】「まで、まだ油断するな！冷やかしかもしれないからな！」

俺はひとまず前金として、その半額の百五十万を振り込むように、相手へと連絡した。相手は即座に、俺の口座へ百五十万を振り込んできた。こいつ本物だ。嘘じゃない。俺は男に電話をかけ、今夜の処女喪失生放送について打ち合わせを行った。

【俺】「それではよろしくお願いします！」

俺は緊張を押さえ込みながら、相手との打ち合わせを終え、電話を切った。

男は、女の子と話すのに慣れていない。本当にただのアイドルオタクのようだった。これなら面倒な事になる心配も無さそうだ。

俺は男と打ち合わせした内容を思い出しつつ、今夜の破瓜喪失生放送に向けて、色々と準備を進めていった。霊夢ちゃんの子宮にキモオタの精液が注ぎ込まれるとか想像するだけで、興奮で子宮が疼いてくる。



【俺】「さあ行こうかな…」

準備を終えた俺は、必要な荷物を持って、指定した待ち合わせ場所へと移動した。生放送の都合上、普通のラブホテルより、ちよつと変わった場所の方が面白いだろうという事で、近所にある廃墟となった工場を使う事にした。

霊夢のような美少女が、廃墟で処女喪失とか、陵辱感がヤバイ。



【通行人】「うわ、あの子すげえ可愛い…!」

【通行人】「いまだきブルマってどこの学校?」

【通行人】「あれ、あの子どこかで見ただような…」

案の定、通行人達の注目を集めている。こんな時、本当に美少女なんだなと実感する。

ブルマの方が動きやすいと思って出てきたが、セーラー服に着替えてきた方がよかったか?

霊夢ならどんな格好をしても注目を集めてしまうので同じ事だろう。

俺ははやる気持ちを抑えながら、目的地へと歩いていった。

【俺】「こんにちはは。私が博麗霊夢です」  
【キモオタ】「あ、なんだ、こんにちはわー！」

俺が指定した廃墟工場に到着すると、そこには小太りの男が二人で待っていた。こいつが霊夢の処女を落札したアイドルオタらしい。確かにいかにも童貞という雰囲気がかもしている。



【霊夢】「まずは処女の落札、ありがとうございます」

今日は処女喪失シーンを生放送しますから、よろしくお願ひしますね」

【キモオタ】「なんここのちらこそ！ 童貞ですがよろしくおねがいます！」

相手は本当に女の子に免疫が無いようで、顔を真っ赤にして挙動不審になっている。

実際キモい相手ではあるが、中途半端に女慣れしたチャラ男が来るより、この方がやりやすい。

俺は早速、生放送の準備を開始する事にした。

俺は廃墟の壁際にパソコンとカメラをセットし、スイッチを入れた。

【俺】「こんにちは、博麗霊夢です♪」

【コメント】「霊夢ちゃんキターー!」

【コメント】「今日は体操服とブルマ?」

【コメント】「ブラしてない! 乳首透けてる!」

俺がカメラに向けて挨拶をすると、次々とコメントが流れる。

中には、霊夢の処女を奪うのは俺だったのに、という妬みコメントも流れるが、早く処女喪失シーンを放送してくれという声が圧倒的だった。

【俺】「それでは、霊夢の処女喪失生放送を開始したいと思います♪」

そして俺は、キモオタを近くに呼び寄せ、目の前に膝を付かせた。



【俺】「ほら、膝を付けて私のブルマに顔をうずめなさいっマ」

【キモオタ】「は、はいっー」

キモオタはドMだった。霊夢のような美少女になじられながら、童貞を喪失するのが夢だったそうだ。それに、相手に主導権を握られるよりも、俺としてもこっちの方が気楽でやりやすい。

【俺】「どう？ ノーパンで二晩履いてたブルマの匂いは」  
【キモオタ】「さ、最高ですっー!!!」

キモオタはペニスをギンギンに勃起させながら、必死に俺の股間に顔を刷り込んでいた。布越しに感じられる生暖かい鼻息と、ブルマの布地が割れ目ごとすれていくのがとても気持ちいい。

「ぽろぽろ愛撫されてるよ。俺は急に尿意を催した。」

【俺】 「んっ…オシッコしなくなっちゃった。」

「そうだ、貴方今から便器になりなさい。」

「ブルマにしっかりと口をつけるのよ？わかった？」

【キモオタ】 「はいっ！ 霊夢様のおしっこ飲ませて頂きますっ！」

キモオタはブルマの布地にピッタリと口を引っ付けた。

それを確認した俺は、下腹部に力を入れ勢い良く放尿すると、

キモオタは口を必死に動かして、喉を鳴らしてそれを飲んでいった。

【俺】 「あははは！ こいつ本当におしっこ飲んでる！ キモイ！！」

俺はひたすらキモオタをなじりながら、「一滴残らず膀胱の尿を出しつくした。」



俺はおしっこを出し終えた後、恍惚とした表情を浮かべたキモオタに命令を出した。

【俺】「あーあ、アンタがちゃんと飲まないから、

ブルマがびっちょびちよになっちゃない。

床にもいっばいおしっここぼれたし。

ちゃんと掃除しなさいよね？」

【キモオタ】「はいっ！ 霊夢様のおしっこ掃除しますっ！」

【コメント】「うわ、霊夢ちゃん容赦ねえwww」

【コメント】「俺も霊夢ちゃんのおしっこ飲みたい」

キモオタはブルマに染み込んだおしっこを音を立てて吸い上げた後、

まるで俺に土下座をするかのような体勢になり、床にこぼれた尿を舐め始めた。

画面に流れるコメントも、俺を賛辞する声と変態共の声で溢れていた。

【俺】「さあて…ブルマに染み込んだおしっこは、どうしようもないから、気持ち悪いし着替えさせてもらうわね。そこで敷物になりなさい」  
【キモオタ】「よ、喜んでっ！」

俺はもうソリソリでDS女を演じ、キモオタの顔面に座り込んだ。  
俺はそのまま、キモオタとカメラに見せ付けるようにブルマを脱ぎ捨てる。  
キモオタの鼻息が股間に当たってくすぐりたい。

【俺】「さて、アンタの童貞を奪う服装、何か希望はある？」

【キモオタ】「ほ、はいっ！このレーススカーン衣装をお願いしますっ！」

そう言うてキモオタは、持ってきた紙袋からレーススカーン衣装一式を取り出した。  
こんなものまで用意していたのかと関心しつつ、俺はその衣装に着替えて行った。



【俺】「それじゃ着替えてあげる。じばろんそいで見てなれら」  
【キモオタ】「ほ、はいはいはい」

レースクイーンの衣装は、ニーツックス、レオタード、ジャケットの3つだ。どれも布地が薄く伸縮性があって、すべすべしてさわり心地が良く、ぴっちり張りついて肌を透けさせるような、そんな材質だ。触っているだけで気持ちいい。

【俺】「あっ……これヤバッ……」

視聴者に裸を見せるため、まずはジャケット、最後にレオタードを着る事にした。すべすべのニーツックスをはくと、足全体の感覚が鋭くなったような気さえする。こんな服装で処女喪失とか、エロい上に滅茶苦茶気持ち良さそうだ。俺はドキドキしながら、レオタードに体を包み込ませた。



俺がレオタードにその身を包むと、レオタードに書いてある文字が読めるようになった。画面に映し出された英語には、公衆便器、レイプフリー、性奴隷などの卑猥な文字が書かれていた。こんな美少女がこんな卑猥なレオタードを着ているなんて、本当にツクツクする。

【俺】「へえ…この私にこんな恥ずかしいレオタードを着せるんだ。」

こんな薄手でピッチピチに張り付いて、乳首とか割れ目とか透けてるじゃないよ。それに何この英語。この私を性奴隷とかに公衆便器扱いするとはいい度胸ね。

こんな卑猥な服を渡すような変態は、たっぷりお仕置きしなきゃいけないわね。」

【キモオタ】「ひいひい！ すみません！ お仕置きしてくださいいっしょー！」

キモオタはお仕置きという言葉に嬉しそうな顔をして土下座をした。

俺はそんなキモオタの頭を足でぐりぐりと踏みつけながら、

レオタードで包まれた自分の体を指でなぞり、そのすべすべした感触を楽しんだ。



【俺】「それじゃ、まずは股間を露出させなさいっ」

俺がそう命令すると、キモオタは恥ずかしがりながらも服を脱ぎ、勃起したペニスを露出させた。



男がペニスを露出させると、ムワツと男の匂いが鼻を刺激する。

嗅ぎなれた男の体臭、ペニスの匂い、それなのに、その匂いで子宮が疼く。女の体だからだろうか、その臭いペニスを受け入れたくて仕方がない。

【俺】「すっごい汚いしクツサイし、ちゃんとお風呂で洗ってるの？」

【キモオタ】「すみませんっ！ こと最近入ってません！」

【コメント】「うわっWWW 初体験がチンカスまみれのキモオタペニスとかWWW」

男のあまりの不潔さに、コメント欄はどんどん盛り上がってきたようだ。

俺も興奮してきた。

【俺】「それじゃ、たっぷりお仕置きしてあげる。アマンタの大事な童貞、公衆の面前で、逆レイプで奪ってあげるからっ！」  
【キモオタ】「は、はいはいっ！」

俺はキモオタの上に跨って、その凶悪なペニスに割れ目をこすりつける。俺の割れ目はもう前儀の必要すらないほど濡れてほぐれていた。

そしていよいよ挿入しようと思った時、画面に質問の「コメント」が流れた。

【コメント】「あれ？ 霊夢ちゃん、ランドーム着けないの？」

そういえば、ランドームをつけない約束を公表していなかった事を思い出した。



【俺】「コンドーム？ 何言ってるんですか？」

「こんなキモオタ相手に、そんな一人前の装備なんて必要ないです。

「精液もチンカスも何もかも搾り取ってやりますよ」

【コメント】「まじかよ！ 初体験でチンカスペニスを生挿入とか！」

【コメント】「うっわ！ マジで羨ましい！ 俺も金つき込めばよかった！」

【コメント】「霊夢ちゃん早く挿入して中出し見せてくれよ！」



【コメント欄が盛り上がる。有料会員がどんどん増え、視聴者が増えていく。

でも、今の俺はそれによる利益よりも、こんな美少女が大勢の男に見られながら、

チンカスペニスを処女を喪失するという事、そしてそれが俺だという事に、強い興奮を感じていた。

そして俺は、ゆっくり腰を持ち上げ、男のペニスの上に割れ目をあてがい、腰を沈めた。

《ずぶううううううううううう……》

「俺」「ひうっ……ああああああああああつっつっ……！」

キモオタのペニスが、俺の割れ目をこじ開けながら、体の中に入ってきた。文字通り、身を切り裂くような痛みが割れ目から伝わってくる。

しかし、不快な痛みではないし、すぐにその痛みは痺れるような快樂へと変わって行く。

「コメント」「おおお！ 霊夢ちゃんの処女喪失だあ……！」

「コメント」「マジかよ、本当に生で挿入した……！」

「コメント」「マジでエロすぎだる霊夢ちゃん……！」

「コメント」を横目で、俺はゆっくりと腰を動かし始めた。





【俺】「んっ……ひっ……」

少し腰を動かすだけで、とんでもない気持ちよさだ。女の体で初めて分かったが、チンコってこんな気持ちいいものだったのか。膣の感覚が鋭敏になる。ペニスを突き出す血管の形、こすりつけられるチンカスまで分かる。ペニスの先端がこすり付けられる子宮口。その全てが快楽として伝わってくる。ダメだ、もう腰を止める事なんて出来ない。俺は無心になって腰を動かした。

【キモオタ】「はうはあああっつっ……」

キモオタが情けない声を上げている。あまりの快楽に、こいつが人格を持った人間だった事をすっかり忘れていた。



キモオタの情けない声で我に返った俺は、何とか呼吸を整える。

体が跳ね上がるような快樂の中でも、少しずつ落ち着きを取り戻してきた。

よし、ここからは肉と肉がこすれあう快樂だけでなく、もう少し色々楽しむ事にしよう。

【霊夢】「アంతのチンカスオチンチン、私の処女マスコで食べられちゃったわよ♪

どう？ 半分以下の年齢の小娘に犯される感想は？」

【キモオタ】「ひいいいつつ！ さ、最高ですっ！ 気持ちよすぎるうううー！」

【霊夢】「ふふっ、これじゃ全くお仕置きになってないわね♪

んっ…中でチンカスがこすり付けられて

ザラザラしてるっ…最悪っ♪」

俺がノリノリで実況すると、大量のコメントが流れた。



「メント」 「うっわ、なんだこの処女ッ！ エロ過ぎるだろ！」

「メント」 「どいうか本当に処女なのか？ 霊夢ちゃん初めてじゃないでしょ？」

「メント」 「いやでも、昨日ちゃんと処女膜まで生放送してたから間違いないぜ！」

「メント」 「これが処女ビッチって奴か、最高です！ 俺も犯してください！」

「俺」 「何言ってるんですか？ さっきまで処女だったに決まってるじゃないですか♪

この私がヤリマンビッチみたいない方、辞めてくださいよっ！」

「メント」 がどんどん盛り上がるのを見て、俺は物凄い優越感に浸っているのを実感した。

俺はこんな大勢の男達の前で、大金を貰って気持ちいいセックスをして、

アイドル扱いを受けているのだ。

こんなに気持ちよくて気分のいい事は味わった事がない。

俺は最高の快樂のまま、腰を動かした。



「キモオタ」「ひいつ…も、もう我慢できないっ…!」

「俺」「っ…も、もう出るの?」

霊夢の膣があまりに名器だからか、挿入して5分程度で、キモオタは苦しそうな顔を浮かべた。少しでも俺の膣を楽しもうと、射精を必死に我慢しているようだが、それも無駄な抵抗だ。

俺は無意識に腰を沈め、子宮口に龟头の先端をめり込ませ、射精に備えていた。子宮が精液を欲しがっているなんて台詞、エロ漫画でしか見た事が無かったが、本当に自分の子宮が射精を待ちわびているのだと実感した。

この状態で子宮に精液を叩きつけられたら、どうなってしまうのだろうか。俺はその瞬間が来るのを待ち望み、膣を強く締め付けた。

そして、大きくペニスが脈打った。





「キモオタ」「うごごご……あつ……あああつ……」

キモオタも初セックス初中出しがあまりにも気持ちよすぎるのか、声にならない声を上げる。

「コメント」「おお、イッてるイッてる!」

「コメント」「あれ完全にキモオタが中に出してるよなあ……」

「コメント」「初セックスで初中出しで絶頂か! やべえなこれ!」

「コメント」を読んでいる余裕が無い。俺はただ臍を締め付け、キモオタのペニスから必死になって精液を搾り取っていた。



それからどれだけの時間がたったのか。恐らく数分程度だろうか。

あまりの快楽に、永遠とも思える体感時間を味わい、ようやく体が落ち着き始めた。キモオタの射精も次第に緩やかになり、ついにペニスを振るわせるだけで精液が出なくなった。

【俺】「はあっ…はあっ…。こ、こんなに気持ちいいなんて思ってなかった…!」

やっと落ち着いた俺は、呼吸を整えてそう呟いた。子宮に精液が溜まつている感覚が物凄く心地いい。このまま精液を溜め込んだままにしておきたいと、俺の体は本能的にそう感じていた。



「コメント」 「霊夢ちゃん落ち着いた？ 折角だから繋がってる所、良く見せてよ」  
「コメント」 「そうだそうだ、ペニス抜く前に結合部が見たい！」

画面にそういうコメントが流れて、確かに俺自身も繋がっている所をちゃんと見て居なかつた事を思い出し、繋がったまま両足を広げた。両足を広げた事で、膣の圧力が少し弱くなったのが、ゴボリと音を立て、膣とペニスのスキマから精液があふれ出してきた。

【俺】 「すごい…本当に繋がってる…」

俺のピンク色の膣口に、グロテスクな色をしたキモオタペニスが突き刺さって、そのスキマからチンカスと精液と愛液が混ざった液体があふれ出している。こんな「エロい事」になっていたのかと実感し、再び子宮がキュンキュンと疼きだしていた。





子宮の疼きは止まらず、まだまだ男を絞り足りない気もするが、キモオタのペニスからは、もう精液を搾り取れそうになかったので、俺は一旦、この放送を締める事にした。

【俺】「さて、これで私の処女喪失生放送はおしまいです。

後は着替えるだけなので、もうしばらくお待ち合STUSSA」

俺はそう言っつて、キモオタと繋がったまま、衣装を脱ぎ始めた。

【キモオタ】「えっ……？ き、着替えるのに、オチンチン抜かないんですか……？」

【俺】「着替える間、アンタはただの敷物なんだから、黙って敷かれてなさいっ！」

【キモオタ】「は、はいはいっ……！」



俺はキモオタと繋がったまま、何とかレオタードを脱いだ後、両足をわざと広げて見せ付けるようにニーツツクスを脱ぎ、その後、頭の上から被るようにスカートを着用した後、紺のハイツツクス、セーラー服と順に着用していった。繋がったままの着替えシーンは中々新鮮だったようで、視聴者のコメントは概ね好評だった。

【俺】「それでは着替えが終わった所で、今回の放送を終了しますね。それではまた明日、よろしくお願ひします〜」

俺はそう告げて、最後までキモオタと繋がったまま、処女喪失放送を終了した。キモオタは俺の下で、最後までビクンビクンと面白く痙攣していた。

【俺】「んっ……よしよし……」

【キモオタ】「ひっ……あっ……」



少し名残惜しいが、俺はキモオタからペニスを引き抜いた。

子宮に入った精液が少しずつ溢れていたので、とりあえずタンポンで栓をした。

こぼれてくると面倒というのもあったが、子宮に精液が入っている満足感を味わいたかったからだ。

【俺】「これでお終いですね。こんな感じで良かったのかしら？」

【キモオタ】「はいっ！ 最高でした霊夢様っっ！！」

キモオタはそう言って、荷物から分厚い封筒を取り出した。

俺はそれを手に取って、百五十万円である事を確認すると、キモオタに別れを告げて家路へとついた。

帰宅後。

疲れたのでもう休もうと思い、軽くシャワーを浴びて汗を流した後、パジャマ代わりにスクール水着に着替えた。女の服って、何で揃いも揃って、こんなにびっちりして着心地がいいんだろな。

【俺】「さて、明日は何をしようかな？」

俺は子宮に溜まったままの精液を感じながら、ノートパソコンを開いて、明日やる事を考えた。

そう言えばあのキモオタ、A○Bに金を突っ込んでるって言うってたな。

A○Bに金を突っ込むというのは、握手会が目当てという事か。

握手会。そうか、明日は握手会をしよう。俺は早速、有料会員プランに握手会プランを追加する事にした。



翌朝。

【俺】「どうなってるかな？」

俺が有料会員プランを確認すると、昨日の処女喪失生放送が知れ渡ったのが、有料会員数が四桁に迫る勢いになっていた。さらに、昨日追加した握手会プランも、プラン金額が十万円にも関わらず、すでに二十人程が参加していた。

【俺】「美少女ってスゲエんだな……」

昨日の二百万とあわせて、もう五百万を軽く突破しているのだ。もう俺の借金を全額返済して、お釣りが来る額を稼いでしまった。こんなに気持ちよくて満足感のある事をして金が稼げるなんて、美少女ってすげえなりの想い。



【俺】「さて、そろそろ行くとするか？」



昨日の処女喪失と違い、握手会は人数が多くなる。

従って、握手会の開始は昨日よりも早く、午後からすぐにスタートする予定だ。

会場は例の廃墟、握手会プランに参加している人にだけこっそり教えてある。

俺は会場に移動するために、外出用のセーラー服に着替えようと思ったが……

【俺】「……どうせ現地で着替える事になるんだし、このまま行けばいいか……」

俺は自分の姿を見て、霊夢のような美少女が、スクール水着姿で外を歩いているのを想像してしまった。

そういう想像をしてみました。もうこの衝動を止める事は出来ない。

俺はこのまま外へと歩き出した。

【通行人】「お、おい、あの子…スクール水着？」

【通行人】「な、なんでスクール水着の女の子がこんな所に…」

【俺】「ふふっ…見てる見てる♪」

昼間という事もあり、住宅街は人通りも少ない。

それでもたまに外回りのサラリーマンとすれ違う事があり、

彼等とすれ違うたび、彼等の視線が俺の全身に注がれる。気持ちいい。

そりゃ、こんな美少女がスクール水着姿で出歩いていたら、誰だって注目するよな。

俺は美少女の体を得た優越感と快楽を存分に感じながら、堂々と昼間の公道を歩いた。

そんな時だった。俺は後ろから声を掛けられたのだった。

【男】「ちよ、ちよっとそこの君、そんな格好で何をしてるんだ？」



【俺】「ん？ 貴方はいったい何ですか？」

【男】「俺は私服警官だ。ちよつとそこで話を聞かせてくれないか？」



ヤバイ、まさか私服警官に職務質問される事になるとは。

彼が出した警察手帳を見た俺は、観念して近くにあった公園へと移動した。

【警官】「さ、さて…なんでそんな格好で出歩いでるのか聞かせてもらおうか…」

警察官は俺の姿をジロジロ見て質問を投げてきた。美少女相手だと警察官も拳動不審になるんだな。

警察官の目は、俺の顔、胸、股間、太股に交互に注がれており、その顔は緩んでいる。

そして良く見ると、股間に大きなテントを張っているのが見えた。

コイツはチヨロそうだ。俺はそう考えて、警察官を誘惑する事にした。



【俺】「なんでこんな格好してるかですよね。」

趣味です、趣味。

私、スクール水着で外を出歩くのが好きなんです。見られるのが好きだから♪  
それに、スクール水着で出歩いちゃいけないって法律なんてありませんたっけ？」

俺がそう言うと、警官はさらにうるたえ、勃起を強くした。

【警官】「じ、しかしだな、水着姿で外を歩いていては、性犯罪に巻き込まれる可能性が…」

【俺】「ラフツ…そんなにオチンチン勃起させながら言っても、説得力ないですよ♪」

俺がそれを指摘すると、警官は真つ赤な顔して両手で股間を隠した。こいつ面白い。

【俺】「わかってますよ。まさかおまわりさんが、一般市民を見て勃起するなんて事、無いですよね？」

それはただの病気、そう何かの発作です。こっちに来てください、私が観てあげます♪」



俺は、うるたえる警察官の腕を引いて、公園のトイレの中へと連れ込んだ。  
そして俺は、着替えとして用意していたセーラー服を取り出し、ハサミで切り裂いて床に捨てた。  
突然の俺の行為を理解できず、ただうるたえる警察官に、俺は取引を持ち掛ける事にした。

【俺】「ここで私が大声を出したら、どうなると思います？」

現役警察官、女子●生のセーラー服を切り裂いてレイプ未遂、  
って明日の新聞に載っちゃういますね♪」

【警官】「うー？ なッ…！ 俺を脅す気か！？」

【俺】「はい、そうです。脅します。でも私の事を黙認してくれるなら、  
今すぐここで私とセックスさせてあげます。どうですか？」

警官は俺を睨み付けた後、俺の体を嘗め回すように眺め、そして自らの保身を選んだ。  
俺は警察官を連れて、そのままトイレの個室へと入った。



【俺】「ほら、早く服を脱いでよ」

俺が警官を催促すると、警官は少し悔しそうに、そそくさと服を脱ぎ始めた。

昨日のキモオタとは違い、流石は警察官、鍛え抜かれた肉体と逞しいペニスが露になる。

あれで膣と子宮をかき回されたら、どんなに気持ちいいだろうか。想像するだけで興奮して、我慢できなくなってくる。

【俺】「ふふっ、準備オツケーですね。じゃ、入れて下さいよ」

【警官】「あ、ああ…でもコンドームがっ…」

【俺】「ゴムなんて必要ありません、中出して良いですから入れて下さいよ」

俺のその二言で理性が吹き飛んだのか、警官は獣のように俺の体にのしかかってきた。



《スプウウウツツー！》

【俺】「ひぎっ…あああつっー！」

警官は何の遠慮も無く、俺の濡れた割れ目と、その凶悪なペニスを突き入れてきた。まるで本当にレイプされているような、容赦の無い突き上げに、俺は悲鳴のような声を上げる。

【警官】「うおっ…すっげえ締め付けっ…」

【俺】「あっ…ああああっっ…！」

その筋肉質で極太なペニスは、俺の膣をミチミチと広げていき、その長さで子宮口を力任せに押し上げ、子宮口をこじ開けていく。そんな力任せの乱暴なレイプに、霊夢の体は物凄く興奮していた。

【警官】「おらっ……！ どうだ！」  
【俺】「ひっ……あああああっ……！」

警官は職務質問していた時の挙動不審からは想像で着ない乱暴さで俺の子宮を突き上げた。これがコイツの本性え、俺に声をかけたのも下心だ。そう思えるような乱暴な突き上げに、俺の体はメスの本能で服従し、子宮口を開いていった。そして何度目かの突き上げの後……

《ヌブンツ〜》

【俺】「あひっ……！」

子宮口を完全にこじ開けたペニスが、俺の子宮に深く突き刺さった。

【警官】「なっ…なんだこの感触…」

奥で締め付けられてっ…」

【俺】「ラフツ…子宮に入っただけですよ」

「どうですか？ 子宮気持ちいいですか？」

【警官】「じ、子宮ううううっっっ！」

子宮に入った所で、子宮口と膣を思い切り締め付けてやった。

子宮に入ったという言葉と、今まで感じた事のないであるう感触に、

流石の警官も目を白黒させて、情けなく腰を震わせていた。

【警官】「うぐっ、も、もう我慢できねえっ…」

【俺】「ほらほら、早く出しちゃって下さるよん」

俺が警官の胴体を足でぎゅうと挟み込み、さらに膣を締め付けたところ、警官は射精した。



【俺】「はあっ…はあっ…」

【警官】「はあっ…はあっ…」

警官は俺の子宮にたっぷりと精液を吐き出した後、その巨大なペニスをズルリと引き抜いた。改めて見ると、本当に凶悪なサイズだ。こんな物が、よくこんな小柄な霊夢の体に入ったものだ。

【俺】「ふふっ…気持ちよかったですか？」

【警官】「う…あ、ああっ…」

賢者モードになった警官は、女子○生にしか見えない俺を、レイプしてしまったという事実を認識し、青ざめた顔になっていた。俺はそれを眺め、面白い手駒が手に入ったと心の中でほくそ笑んだ。





俺は膣口周辺に付着した精液を拭き取り、新しいタンポンを取り出して挿入した。結構いっぱい射精されたが、これで精液があふれ出す事もないだろう。そして服を着た警官と共に、トイレの個室から外へと出た。



【俺】「フフツ…やっちゃんいましたね、おまわりさんっ♪」

【警官】「うぐっ……！一時の感情とは言え、本当に申し訳ないっ……！」

【俺】「いえいえ、構いませんよ！でも今後、私のやる事には目を瞑って頂きますし、私がお願ひしたら、ちゃんと聞いて下さいね♪」

賢者モードになった警官は、ひたすら俺に謝罪し、そして俺のお願いを聞き入れてくれた。

俺の子宮に警官の精液がたっぷり入っているのだから、もうどうやったって言い逃れが出来ない状況だ。しばらくHな事で金を稼ごうと思っている俺にとって、自由に動かせる警官の「コネがあるのは心強い。

そして、がっくりとうなだれる警官を尻目に、俺はトイレから出て、目的地へと向かった。

【俺】「お待たせしました。こんにちは。私が博麗霊夢ですよ」

俺が昨日の廃墟工場に到着すると、そこには二十人ほどの男達が待ち構えていた。俺がスクール水着姿で入っていると、彼等は二斉に俺の方を振り向き、驚いたような目で、俺の頭のてっぺんからつま先まで凝視した。



【男】「おっ…霊夢ちゃんこんにちは!!」

【男】「お待ちしておりますました霊夢様!!」

【俺】「こんにちは♪ 霊夢様って…まあいいけど♪」

【男】「今日はスクール水着で来たんだね。すげえ似合ってる。霊夢ちゃん本当に何歳なの?」

【俺】「それを言ったら放送できなくなってしまうので、内緒ですよ」

【男】「うおおおお!! マジかよ!!」

男達は次々と俺の周囲に集まり、俺を褒め称え、そしてにやけた顔で股間を膨らませていった。

【俺】「それじゃ、今からカメラの準備するから、誰から私と握手するか、仲良く順番決めておいてね」

俺はそう言っで、彼等にくじ引きをやらせているうち、撮影用のカメラと端末を、廃墟の壁際へとおいた。彼等は大人しくくじ引きをしつつも、しっかりと俺の尻や股間に視線を注いでおり、待ちきれない様子だ。

【俺】「待ちきれなかったらオナニーしててもいいけど、精液は出しちゃダメだからね？  
ちゃんと私の中に出す事、わかった？」

男達から歓声が上がった。



俺の撮影準備が終わった頃に、どうやら男達の順番も決まったようなので、俺は男達を後ろに下がらせて、早速生放送を開始する事にした。



【俺】「みなさんこんにちは、博麗霊夢です♪」

【コメント】「おお、待ってました!」

【コメント】「霊夢様、今日はスクール水着?」

【コメント】「ホント似合ってるよなあ…マジで女子●生とかなのかな」

画面には俺の事を霊夢様と呼ぶコメントが増えつつあった。

女王様キャラとして定着しているのは不思議な気分だが、その方が元男の俺にとっては都合がいい。

俺は一通りの挨拶をした後、今回の握手会に参加した男達を紹介し、

そして握手会用の服に着替える事にした。

俺は荷物から次の衣装を取り出し、スクール水着を脱いでいった。

「コメント」 「うわ、スク水脱ぐのか、勿体無い！」

「コメント」 「今回はどんな衣装でやるの？」

「コメント」 「霊夢様、こっちにお尻むけて〜！」

毎回、着替えシーンは好評だ。

俺はコメントのワクエストに応じ、カメラに尻を向ける。

綺麗なお尻と割れ目が画面に映し出されると、

またもや画面がコメントで埋め尽くされていく。

「コメント」 「ポイント綺麗な割れ目！」

「コメント」 「はやくHしてる所見せて〜！」

「コメント」 「やっべ、我慢できねえ！」



【俺】「ふふっ、何の衣装でしょうか〜」

「メントを横目に、俺は靴下とスニーカーを脱いで、  
網タイツを取り出し履いていく。」

「ちよつと油断すると破れそうな網タイツを、  
慎重に引っ張り上げた後にローファーを履き、  
蝶ネクタイを首に、カフスを手首につけた。」

【メント】「おお、これバニーガールじゃね?」

【メント】「バニーガールとか俺のツボすぎる!」

【メント】「もうこの時点で似合うの確定!」

「そして俺はレオタードを取り出し、

そこに体を押し込んでいった。」



俺はバニーツー式に身を包んだ後、ドヤ顔で視聴者に見せ付けた。

「俺」 「はい、正解はバニーカールです。今日はバニーカールで握手会をしますよ」



「コメント」 「おおおお！ めっちゃ似合う！ 流石靈夢様！」

「コメント」 「まさか、俺も十万円くらい払っておけば良かった！」

「コメント」 「これは握手会への期待が高まりますね」

画面に映し出された自分を見て思う。ホント靈夢の体は何着ても似合うな。俺は美少女バニーカールである自分自身の姿に興奮し欲情した。

下腹部がキュンキュンと疼いて、子宮の精液の存在感を強く感じてしまう。それを意識してしまうと、早くペニスを突っ込まれたい、子宮に精液が欲しいと思ってしまう。

俺は早速、握手会参加の男達を順番に並ばせ、握手会を開始する事にした。

【俺】「ふふっ、じゃあ最初の人どうぞ」

【男】「お、お願いしますっ!」

俺はその場で脚を開いて座り、パニースーツに包まれた股間をさらした。  
網タイツで包まれた足が我ながら非常にエロく、  
男は俺の目の前にひざをついで、網タイツに頬ずりをする。

【男】「ひ、広げて見てもいいですか?」

【俺】「どうぞ。そうしなきゃ握手できませんもんね」

男はパニースーツの股間をすらし、網タイツの股間部分に  
指をひっかけ、ぶちぶちと干切って広げていった。





【俺】「んっ……あっ……」  
【男】「ご、これが霊夢様のっ……!」

男は震える指で俺の割れ目を左右へと広げると、  
むわっとする愛液と精液の匂いがたちこめ、  
その奥からは精液と愛液の混ざった液体がドロリとあふれ出した。  
考えて見たら、誰かに広げてもらうのは初めてで、少し恥ずかしい。

【男】「そ、それじゃそろそろ……」  
【俺】「ええ、握手しましょうか。私の「コ」と、貴方の「アンコ」でっ」

男はいつたん俺の割れ目から手を離し、ズボンを脱いでペニスを露出させた。  
そして男はその固く勃起したペニスを、遠慮なく俺の割れ目へと突き刺した。






【俺】「んっ……あっ……」  
【男】「うぐおおおっ……!」

この男も童貞だったのが、ぎこちない仕草で、  
乱暴に俺の膣穴へとペニスを突っ込んできた。  
そのまま、ただ自分が気持ちよくなりたいだけの、  
乱暴な突き上げで、子宮口を突き上げる。  
俺の子宮口は、さっきの警官の挿入で、  
すっかり開いた状態になっており、  
男のペニスの先端をしっかりとくわえこんでいた。

【俺】「ホント、童貞ってなんでこうも乱暴なのかしら!」

俺は見知らぬ男のペニスが繋がった膣口を眺めながら、男を言葉で責めてやった。





【俺】「どう？ 私の体で  
童貞卒業した感想は？」

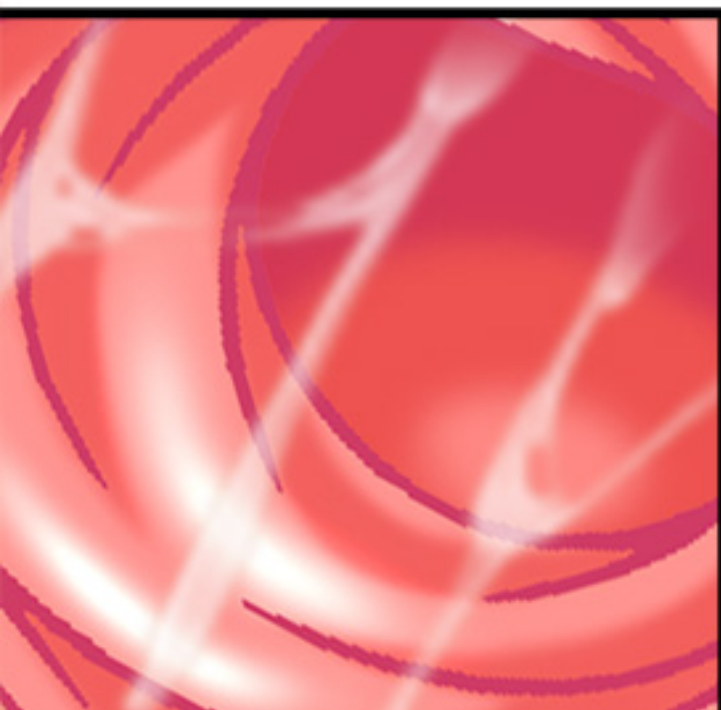
【男】「さ、最高です！  
霊夢様のオマンコ気持ちよすぎっ……」

男は猿のようにカクカクと腰を振り、  
ひたすら俺の子宮をガンガン突き上げる。  
こいつ初めてだから子宮に入ってる事に  
気づいてないんじゃないだろうか。

【俺】「そりゃそうですよ。だって、子宮にまで入ってるんだもの」

【男】「し、子宮にっ！？ ほ、本当ですかっ……！？」

男の動きはいつそう激しくなり、俺の子宮をえべり犯していった。





【俺】「そうそう、その調子。」

もっと突き上げて、私を  
気持ちよくしなさい！」

【コメント】「霊夢様流石やで……」

【コメント】「あんな勢いで突き上げられてあの表情、  
昨日まで処女だったと思えんな……」

ボールペンでの子宮ロオナニー、

キモオタペニスでの初体験、

警官の極太ペニスレイプを経験し、


俺は性行為中にもかかわらず、随分と余裕を持てるようになっていた。

俺はカメラに視線を向け、ペロっ舌を出し、視聴者に余裕っぷりをアピールする。

それに反して、童貞だった男の表情は険しく、1秒でも長く俺の膣と子宮を味わうため、

必死で射精をこらえているのが見てとれた。





【俺】「ふふっ…必死に我慢してる。いつまで我慢できるかな？」

【男】「う…あああうっ…」

男は必死に我慢していたが、もう限界だった。腰をビクビクと痙攣させ、今にも射精する寸前だった。

俺はこの男の、猿のような乱暴な動きを、もう少し味わいたかったが、

今日は二十人を相手にしなければならぬ。

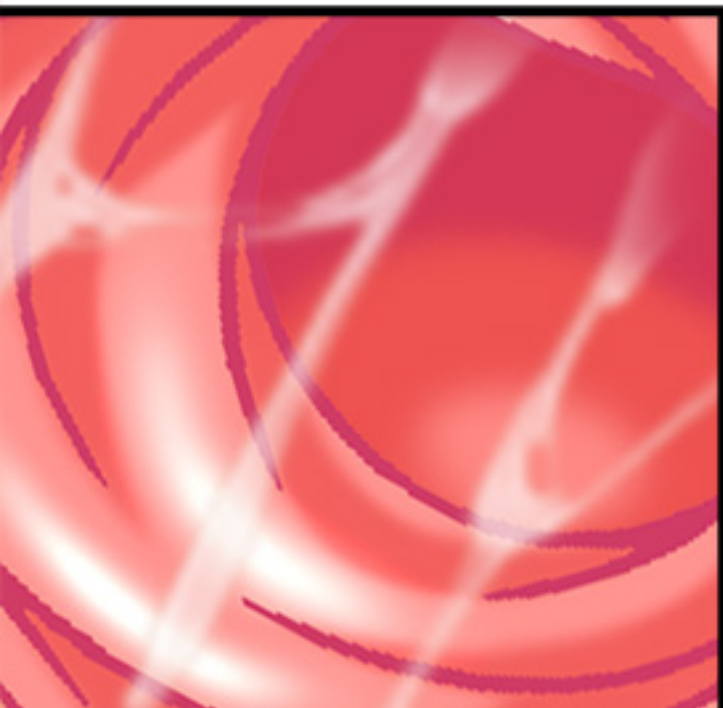
あまり一人に時間をかけて、他の参加者を待たせるのもよくないだろう。

【俺】「ほら、後がつかえてるんだから、さっさと中に出してっ！」

俺は亀頭をキュツと締め付けてやった。

その直後、男は我慢しきれず絶頂した。





《ひゅるるるっっっ》  
【男】「あひあああっっっ！」  
【俺】「あはっ…変な声♪」

男は情けない声を上げながら、俺の子宮内部に精液をぶちまけていった。

【俺】「あっ♡ ああっ♡ いっぱい出てる♡  
私の子宮に精液出てるっ♡」

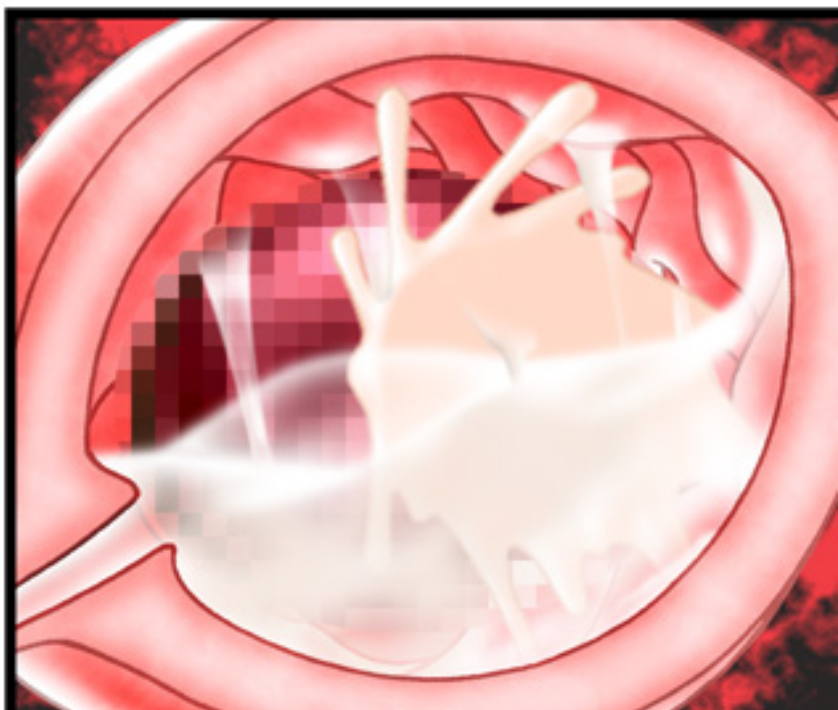
やっぱり子宮に精液を流し込まれる感触は、

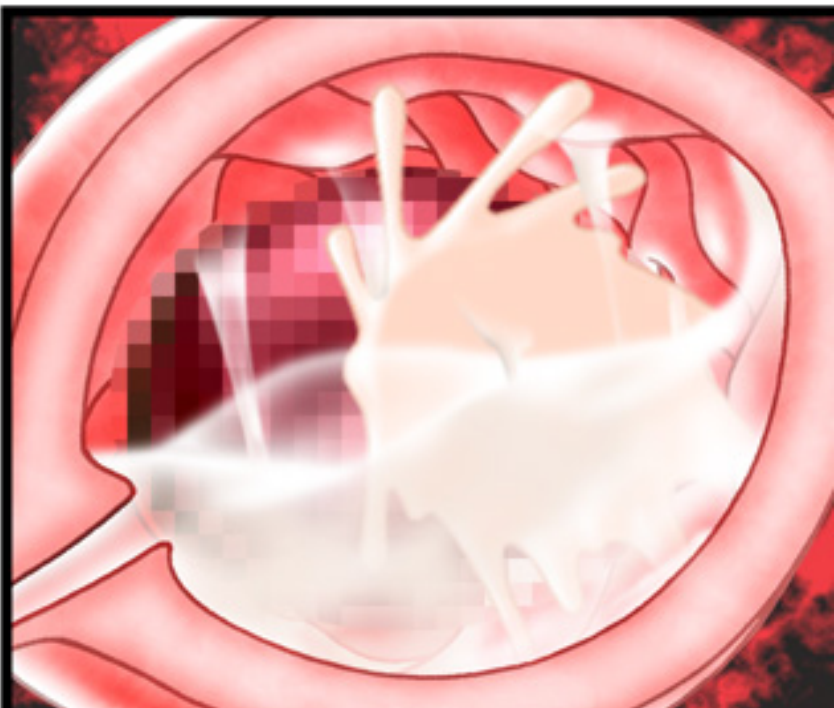
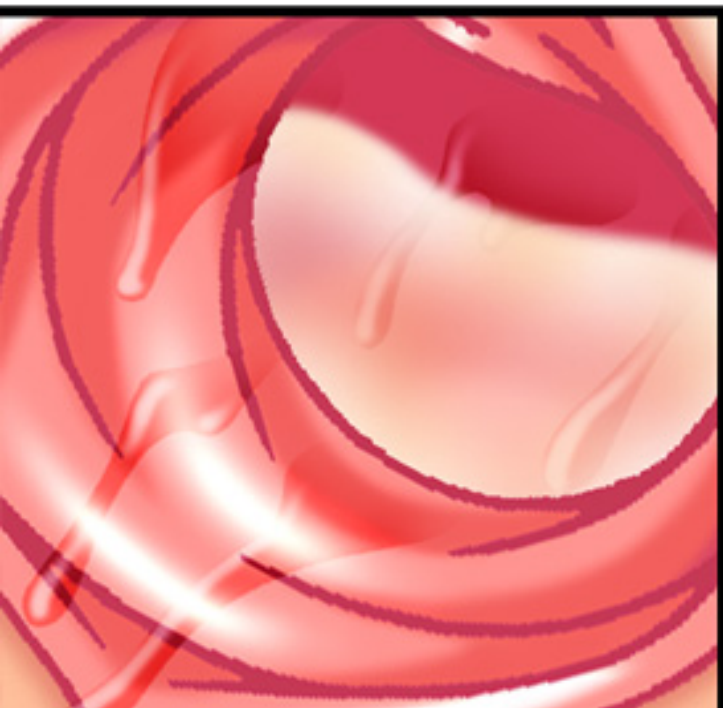
女の体で無ければ味わうことが出来ない最高の感覚だ。

俺は膣を強く締め付け、男の精液を残らず搾り取っていく。

こんなに気持ちのいい液体を、外にあふれ出してこぼしてしまうなんて

勿体無い。







《びゅるっ…びゅるっ…》

男の精液は留まる事を知らず、  
延々と俺の子宮に流し込まれていく。  
その様子を見て、視聴者も興奮を高めていき、  
俺にさまざまな言葉を投げかけてきた。

「コメント」 「うわ、出してる出てる」

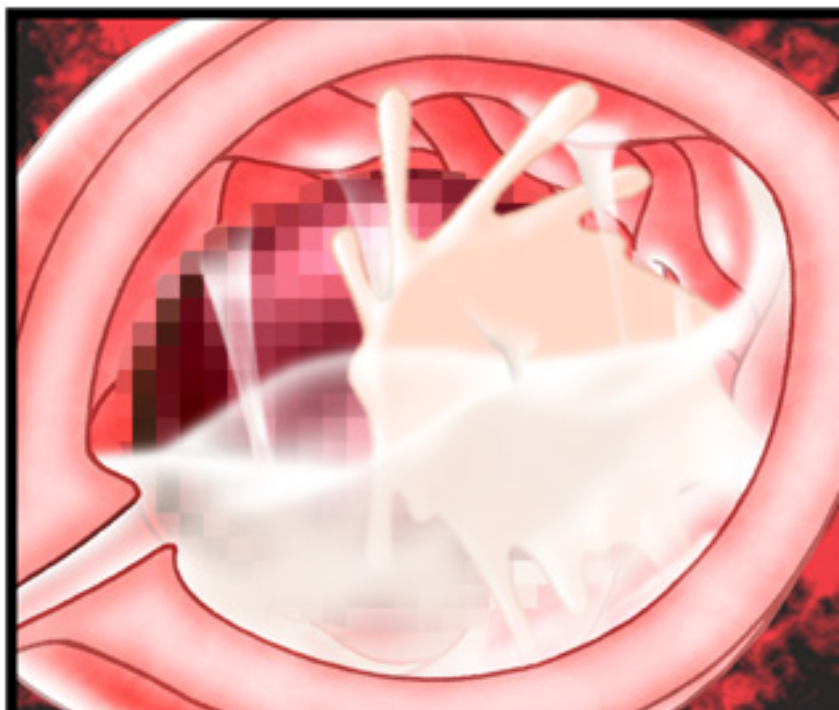
「コメント」 「霊夢様気持ちよさそう」

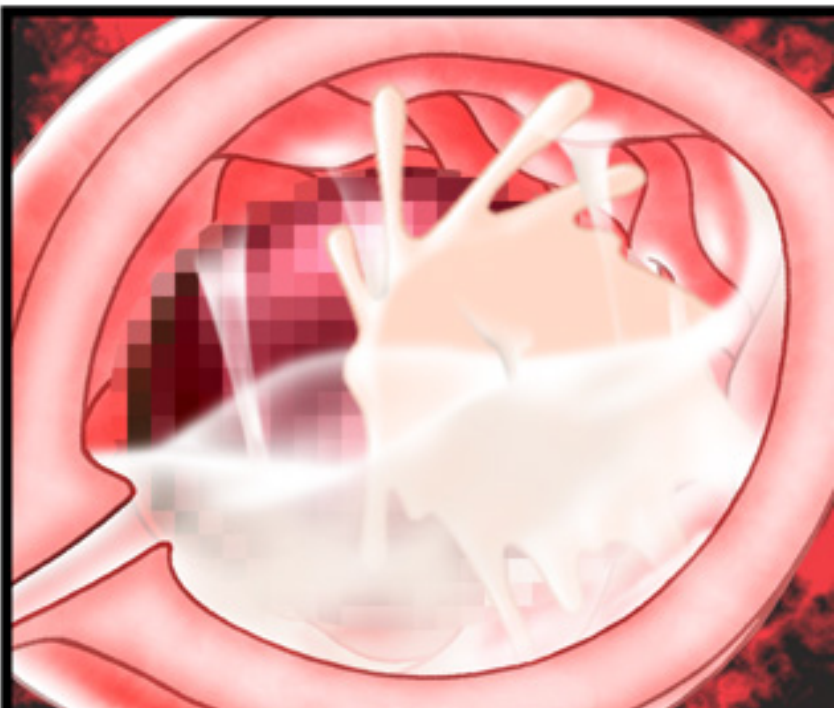
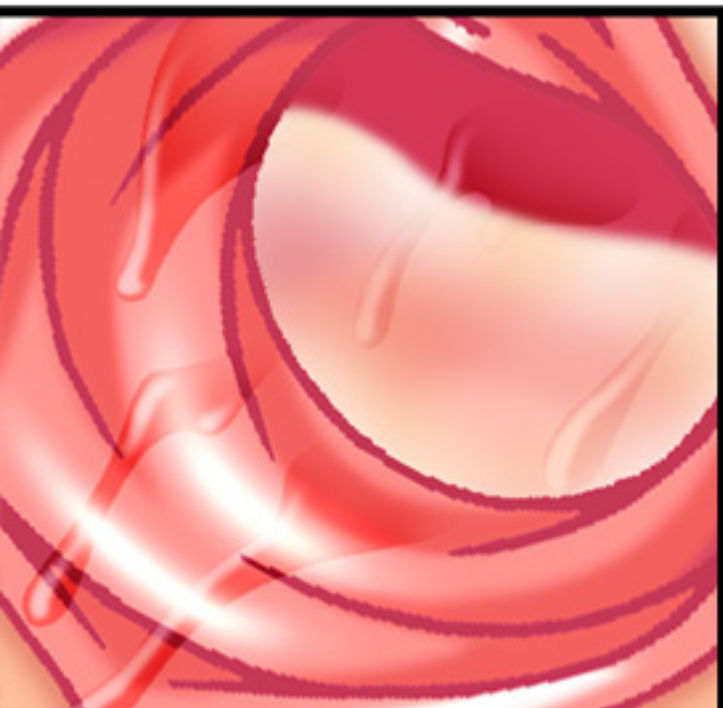
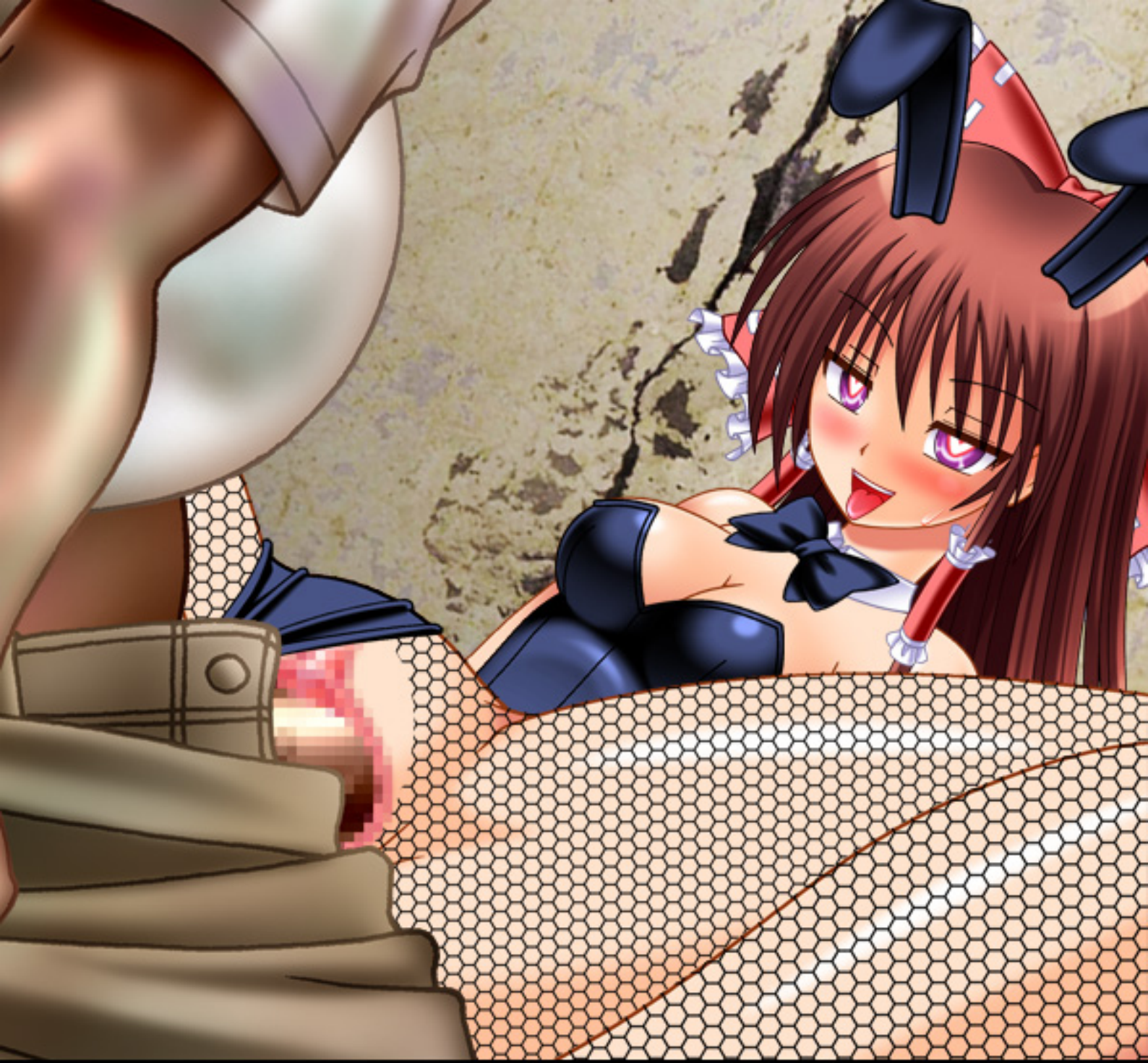
「コメント」 「俺も霊夢様に搾り取られたい」

「俺」 「ふふっ♪ 精液中出しされるのってホントに気持ちいいっ♡

今日一日で二十人分の精液を出してもらえると、ホント楽しみ♡」

俺はいやらしい笑みを浮かべながら、「コメント」に応え、そして精液を搾り取っていった。







【男】「うぐっ…もう出ねえ…」  
【俺】「んっ…♡」

男は俺の子宮に精液を出しつくした後、ペニスを引き抜いて、腰が抜けたように座り込んだ。童貞が霊夢のような美少女、子宮まで挿入できる名器に搾り取られたのだから、無理もない話だ。

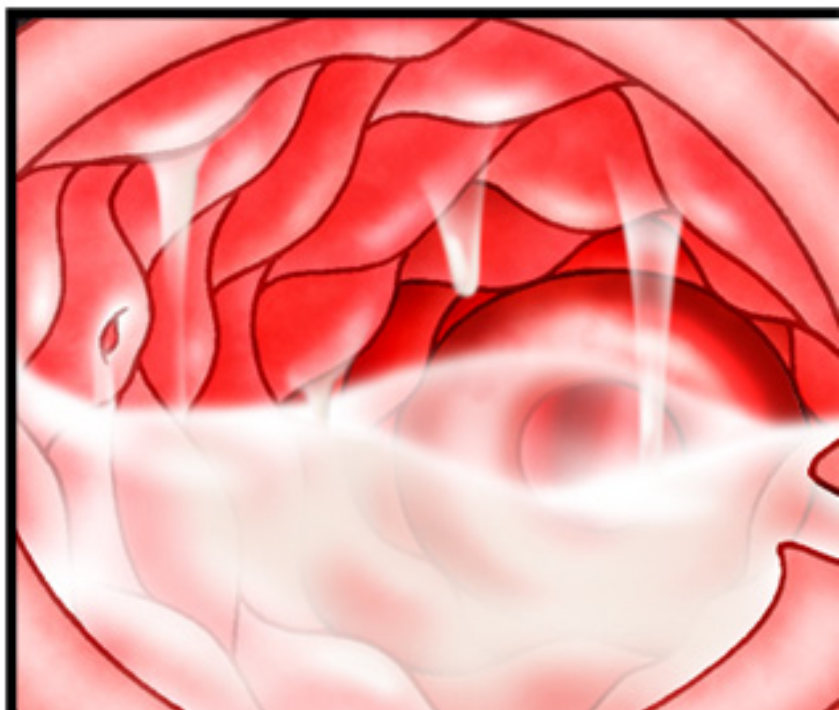
【俺】「オマン！らむんぐてる…♡」


ペニスが抜けたばかりの膣口は完全に閉まらず、

半開きの状態で痙攣を繰り返していた。

俺は画面に映し出された膣口をじっくりと見ると、

半開きになった子宮口の奥に、精液でどろどろになった子宮内部が顔を覗かせているのが気がついた。





せつかくだ。俺の子宮の中も、  
視聴者のみんなに見てもらおう。

【俺】「ふふう…子宮口が開いてるの

皆さんにも見えますか？」

【コメント】「マジで…!？」

【コメント】「うおっ、ホントだ、子宮見えてる!」

【コメント】「なんだこの映像エロ過ぎる…」

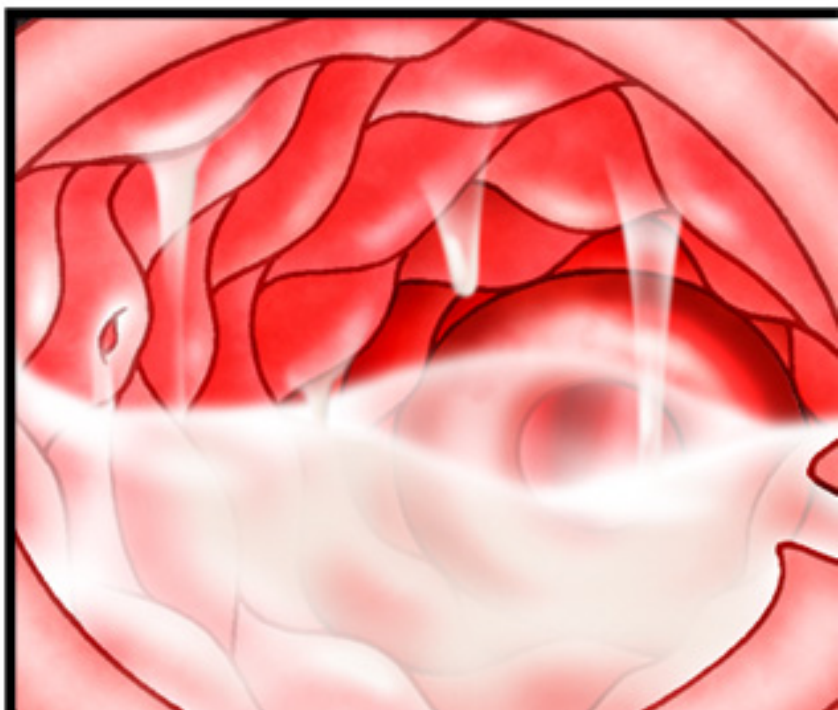
【コメント】「奥に卵管まで見えてるぞ!」

普段は内視鏡でしか見ることの出来ない子宮が、

半開きになった膣口の奥から見えている。しかもその主は美少女霊夢なのだ。

これで興奮しない男などいるはずがない。俺だってめちゃくちゃ興奮してるんだから。

俺はたつぷりと子宮内部まで視聴者と握手会参加者に見せ付けた後、次の順番の男を呼び寄せた。



そこからは、俺の無双状態だった。

俺は次々と参加者と交わり、精液を搾り取っていった。

【男】 「あああつ…霊夢様に逆レイプして頂けて、幸せですっつー」

【俺】 「ホントキモイわねっ…アンタなんて精液タンクとしての

価値しかないんだから、さっさと射精しなさいっつー♡」



昨日のキモオタのようなDM男を組み敷いて、

上からのしかかって犯して、そして精液を搾り取ってやった。

これで5人目だったかな？

子宮にどんどんたまっていく精液が本当に心地いい。

そるそる十人目くらいだろうか。

DMな参加者が多く、騎乗位ばかり繰り返して、足腰が少し疲れてきた。

「コメント」 「おや、霊夢ちゃん動きが鈍ってきたね？ 流石に限界かな？」

「コメント」 「流石に昨日まで処女だったのに、二十人相手はキツイかな？」

「コメント」 「霊夢様が情けなくごめんなさいする所も見てみたいなあ」

「俺」 「誰が限界ですって？ 下らない事言ってるんでないで、私を見てン」ってなぞらっー」

俺が視聴者を罵ると、ありがとうございませすの文字で

画面が埋め尽くされていく。

ホントにゴメンなら、どうしようもない変態共だな。



そして握手会も、残り5人という所まで進んだ。

【男】「おおおおっ……霊夢ちゃん！」

俺がイかせてやるからなっ！」

【俺】「う……あああああ……」

やめっ……あっあああ……」

【コメント】「おお、あのオッサンすげえな」

【コメント】「霊夢ちゃんまたイツちゃってる」

【コメント】「霊夢ちゃん、オッサンセックス気持ちいいですか？」

【俺】「だ、誰がこんなオッサンなんかっ……ひっ！？ ああああああ……」

今度の男は、霊夢の年齢の、二倍どころか三倍もありそうな、脂ぎった五十台のオッサンだった。

このオッサン、見た目は気持ち悪いくせに、風俗慣れしているからか、テクニクだけは無駄にすごかった。

さっさと搾り取ってやるうと思っていたのに、逆に3回もイカされてしまった。



【俺】「あっ……あああっ……」

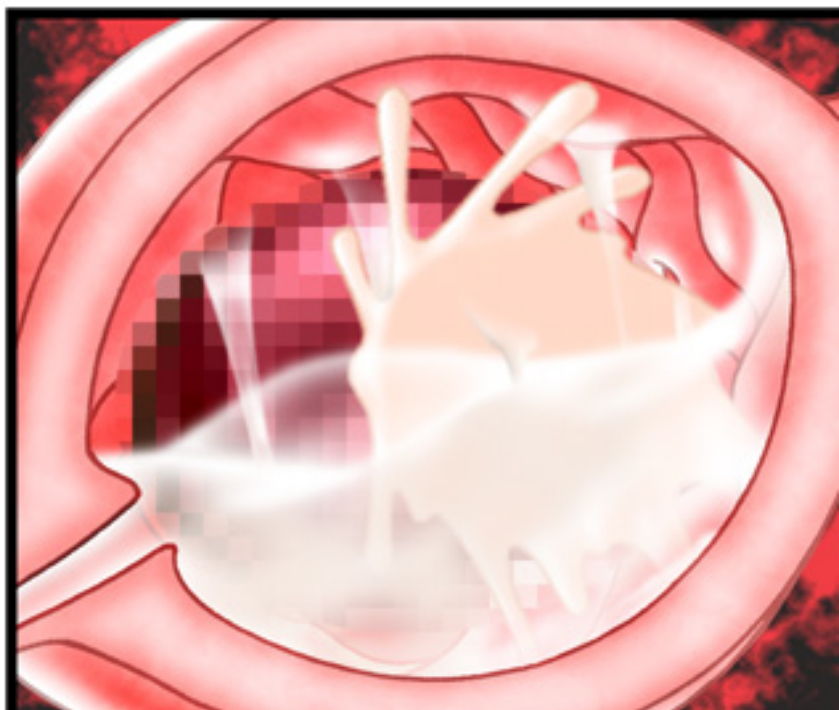
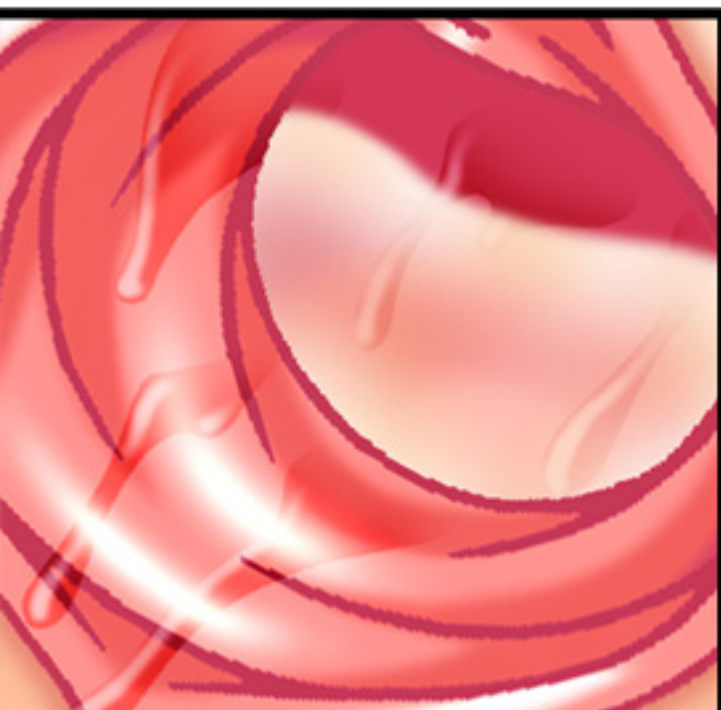
そしてついに、最後の二人。  
もう体力の限界に来ていたが、  
この体は、際限なく男の精液をほしがって、  
勝手に男のペニスを締め付けていた。

【男】「い、いぐせ霊夢ちゃんっ……!」

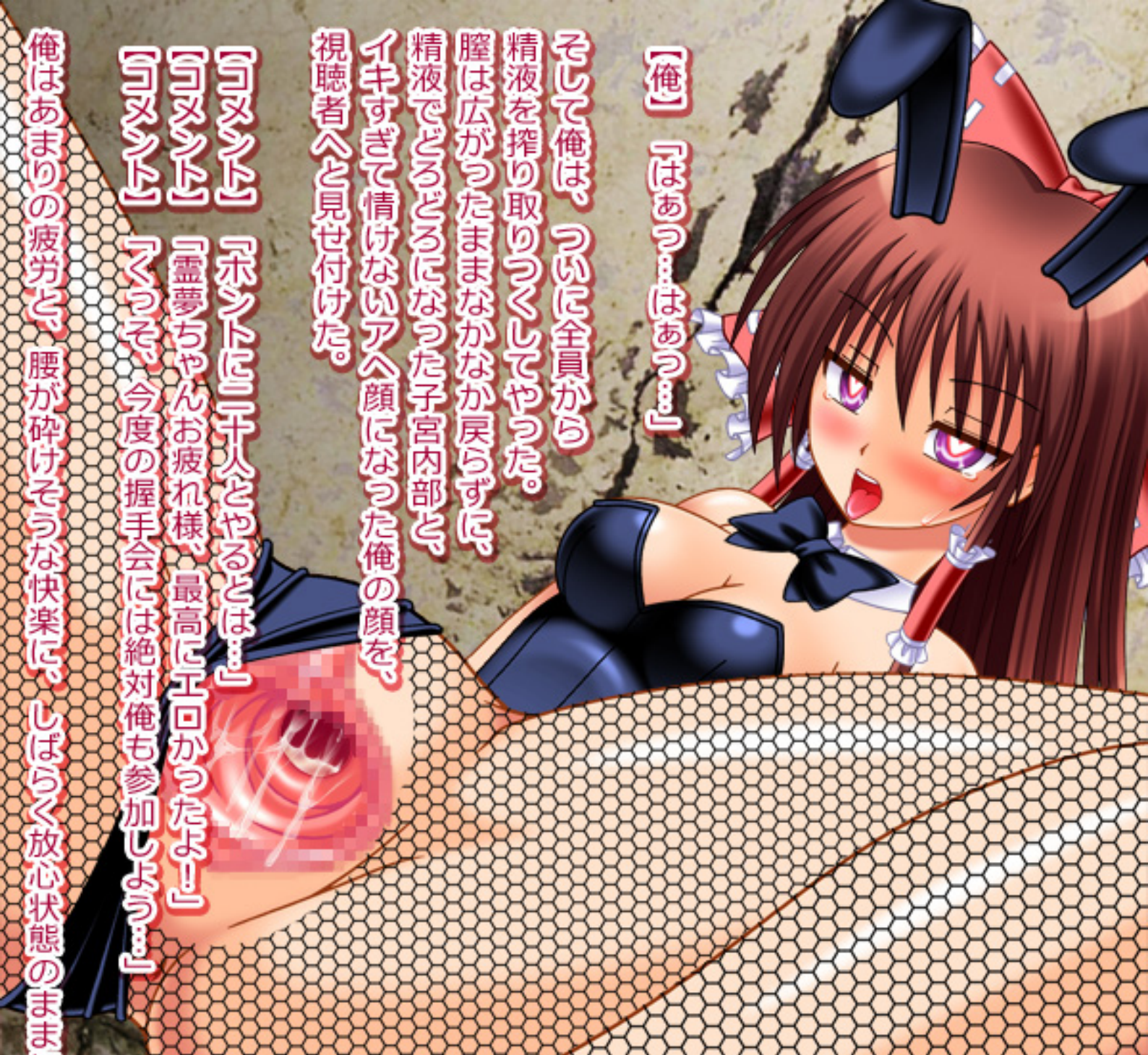
《びゅるるるるるるっっっ!》

【俺】「ひゃいっ……っ……あああああっっっ……!♡」

そして最後の二人が、俺の子宮へと精液をたたき付けていく。  
子宮は二十人以上の精液を蓄えてなお、その精液を搾り取って、  
俺の意思とは無関係に、あふれ出すまいと膣を強く締め付けていった。







【俺】「はあっ…はあっ…」

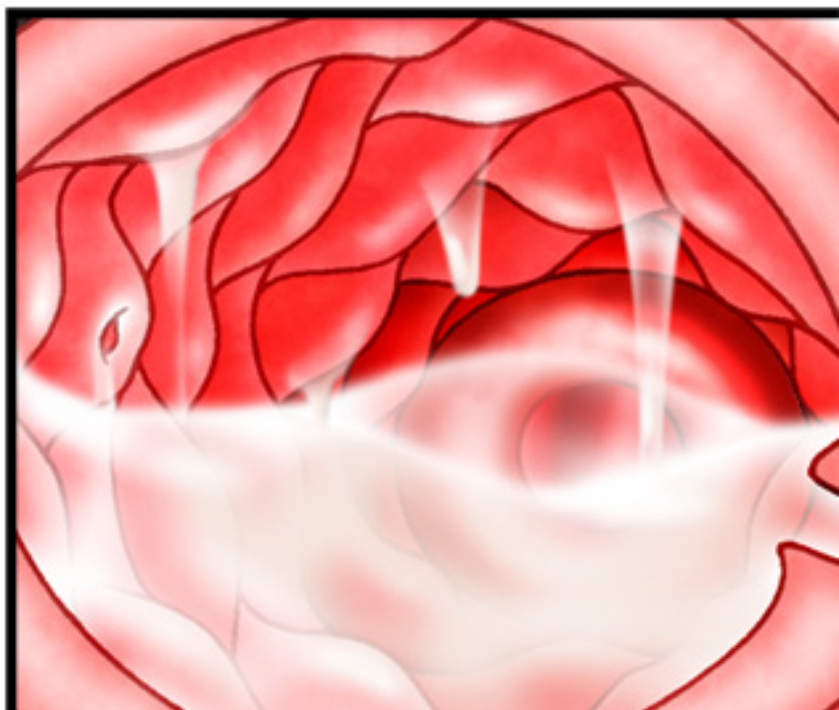
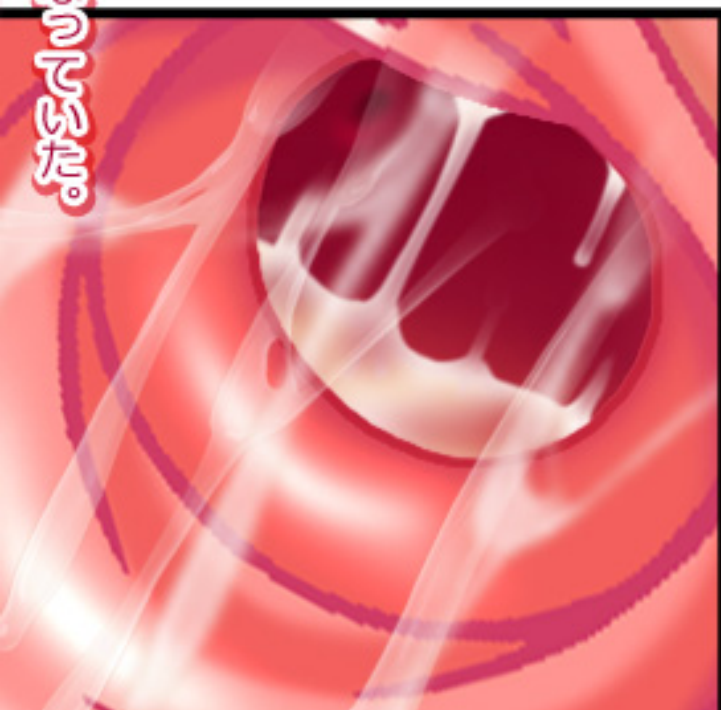
そして俺は、ついに全員から精液を搾り取りつくしてやった。膣は広がったままなかなか戻らずに、精液でどろどろになった子宮内部と、イキすぎて情けないアへ顔になった俺の顔を、視聴者へと見せ付けた。

【コメント】「ホントに二十人とやるとは…」

【コメント】「靈夢ちゃんお疲れ様、最高にエロかったよ！」

【コメント】「くっぞ、今度の握手会には絶対俺も参加しよう…」

俺はあまりの疲労と、腰が砕けそうな快楽に、しばらく放心状態のままになっていた。



【俺】「…よいしょっと…。ホントにこの体はチートだな…」

霊夢の体は若く体力に満ち溢れており、ほんの5分休んだだけで、体力が回復し普通に行動できる状態に戻ってきた。

【俺】「さて、握手会参加の皆様、視聴者の皆様、

私の握手会は楽しんでいただけましたか？」

【参加者】「あ、ああっ…最高でしたっ…！」

【コメント】「最高の握手会だよ！今度は俺も参加させてね！」

【参加者】「し、搾り取られたっ…キンタマ空っぽだよ…」

【俺】「ふふっ…それなら良かったです♪」

それではこれにて、今回の握手会の放送を終了いたします♪」

【俺】「これでよじつと…」

俺は放送を終了し、子宮の精液があふれ出さないよう、再びタンポンで栓をした。二十人を超える精液の量は圧倒的で、下腹部を手でなぞると、ぼっこりと膨らんでいるのがわかる。俺は子宮の精液を心地よく感じながら、撮影用の端末を回収していった。

その後、俺はバッグから取り出した服に着替え、男たちにお礼を述べた。

【俺】「今日は本当にありがとうございました！ それじゃ私は帰りますので、

皆さんも気をつけて帰ってくださいね〜！ またよろしくお願いします〜！」

【男】「おつかれさま！ 気をつけて帰ってね！」

俺は男たちを廃墟に置いたまま、家路へとついでた。

流石に二十人相手の握手会は、随分と時間がかかってしまった。昼過ぎに開始したのに、周囲はすっかり夜になっていた。たまに通り過ぎる通行人の驚いた視線を愉快地感じながら、俺はひんやりとした空気の夜の町を歩いていく。

【俺】 「それにしても、この体はすごいな……」

健康的で美しいだけでなく、Hをすればものすごく気持ちよくそれを数千人の男たちから称えられ、そしてサラリーマンの年収に匹敵する金を2〜3日で稼ぎ出す。この体さえあれば、人生イーजीモードだ。俺は子宮が膨れ上がるほどの精液に満足しつつ、言っではいけない一言をつぶやいてしまった。

【俺】 「ずっとこの体でいれたらいいのになあ」

その瞬間、自分の頭の上から、

《ブツン》

と何かが切れる音がした。

【俺】 「……？ なんだ今の音は？」

俺が周囲をきよるきよると見渡すと、いつの間にか博麗霊夢本人が目の前に現れていた。

【俺】「は、博麗霊夢……？」

目の前に現れた博麗霊夢は険しい表情をしていた。それはそうだろう、自分の姿でやりたい放題やった挙句、それを不特定多数の男たちに生放送したのだ。怒らない方がおかしい。

【霊夢】「……貴方、あれだけ忠告したのに、やっっちゃったわね……」

【俺】「へっ？ Hな事をしてる事か？ べ、別にいいじゃないか……この体は今は俺の体なんだし……肺を貰かれて入院してるんだから、せめてその分は恩恵がないとやってられないぜ……」

【霊夢】「違う、そうじゃなくて……貴方、その体がいいと本気で思ったでしょ？」

【俺】「あ？ ああ……それがどうし……」

俺は霊夢と初めて出会った時の忠告を思い出し、青ざめ、その場へ入り込んだ。



【俺】「ま、まさか…さっきブツンツて聞こえてきたのは…」

【霊夢】「…貴方の本体と魂をつなぐ糸が切れた音よ。」

残念だけど、貴方の本体は先ほど息を引き取ったわ」

まさか、本当に俺が死ぬなんて…。

【俺】「そ、それで、俺はいつたいどうなるんだ!？」

【霊夢】「もうどうしようもないわ。その体で喜らしていくしかない。」

でも、その体の寿命は精々三ヶ月よ」

【俺】「なんてこった…あと三ヶ月の命だなんて…」

【霊夢】「私にも責任はあるから、何とか寿命を延ばせないかやってみるけど、あまり期待しないでね…」

そう言うって霊夢は陰陽模様の宝玉を取り出し、俺の体に当てた。



【俺】「う、うわっ！？ なんだこれっ……!？」

その陰陽の玉は俺の体に吸い込まれ、体の中をゆっくりと移動していった。そして、下腹部の辺りに移動した所で、その変化が起きた。

【霊夢】「えっ……？ 何これっ……!？」

【俺】「う……あああああ……!？」

陰陽の玉は俺の子宮の中に入り、びくんびくと動き出したのだ。それはまるで、別の生き物の心臓のように脈打ち……子宮に入っていた精液を一滴残らず吸い取ってしまった。



【霊夢】「ま、まさか…この式神作成用の陰陽玉に、そんな効果があるなんて…」

【俺】「な、何が起きたんだっ…？ この体は大丈夫なのか！？」

【霊夢】「その玉はね、式神を作る際、仮の命を与えるための物なの。

原材料は私の卵細胞。だから私と同じ格好になったというわけ。

私も知らなかったんだけど、どうやらそれ、

精液を吸い取って生命力にしているみたいなのよ」

【俺】「…つまりどういう事だっ…？」

【霊夢】「つまり、毎日精液を子宮に注ぎ込み続ければ、

寿命が延びるって事よ。

そうね…今日と同じ分量を毎日注ぎ込んでいけば、

あと二十四年くらいは生きられるんじゃないかしら？」

【俺】「だ、二十四年も！？」

俺はびっくらした。





【俺】「じゃ、じゃあ、もっと注ぎ込めば、もっと寿命が延びる可能性も？」

【霊夢】「吸い取れる量に限界があるだろうけど、やってみなきゃわからないわね。でも多い分には問題ないと思うわ。吸い取れなくなるだけだし」

【俺】「そ、そうか…なるほどっ…」

俺は一安心した。そしてこの体で生きるためには、精液が必要不可欠だという事に、心から喜んだ。もしかして、この体が精液をほしがっていたのは、そういう事情があったからかもしれない。

【霊夢】「とにかく、貴方の体はその体になったんだから、色々と説明しておくわね」



霊夢の説明をまとめるとこんな感じだった。

- ・この体に注がれた精液は、すべて生命維持の靈力に変換されるため、妊娠する事ができない。
- ・この体はあくまで式神なので、これ以上成長する事ができない
- ・食事や睡眠は必要だが、人間の体と構造が違うため、病気になるらない
- ・毎日二十人分の精液を補充した場合、寿命は二十四年程度

【霊夢】「わかった？ 不便かと思うけど諦めてね」

【俺】「あ、ああ…わかった…」

不便などどころか、俺にとってはメリットしかない。

老いず、病にならず、子供も出来ないなら、やりたい放題じゃないか。

寿命が二千年程度しかない事を考慮しても、こんなにおいしい話は他にないぞ。

俺は霊夢の説明を聞きながら、心の中で大喜びしていた。



【霊夢】「それじゃ、私もこの世界でやる事を終えたから、幻想郷に帰る事にするわ。

今回は巻き込んだじゃって、本当に悪かったわ。

貴方には申し訳ないけど、その体で強く生きていってね」

【俺】「あ、ああっ…霊夢さんもお元気で…」

そして霊夢は消えるように姿を消した。

霊夢が居なくなり、一人ポツンと残された俺の顔には、無意識に笑みがこぼれていた。

【俺】「ふふっ…この体で生きていかなきゃいけないなんて…」

これからも、こんな美少女の姿で、あんな気持ちいいセックスをして、大金を稼ぐ事ができる。

俺は今日から…いや、私は今日から、正真正銘の博麗霊夢という美少女になったのだ。

これからの事を考え、俺は期待に胸を膨らませていった。



【私】「さて…確かあの公園はこっちだったと思うけど…」

私は霊夢と別れた後、家に帰らず、反対の方向に向かって歩いていました。私がまだ男だった時、一度だけ通りかかった事のある公園。そこには大勢の浮浪者が住み着いていた。

【私】「ふふっ…いるいる♪」

【浮浪者】「な、なんだあの女の子…？ なんでこんな時間に…」

【浮浪者】「こんな時間に、こんな所へ来ちゃあぶねえぞ。帰れ帰れ」

私が公園内へと立ち入ると、浮浪者たちはびくくりした表情で、一斉に私を見た。

こんな真夜中に、こんな美少女が、こんな浮浪者だらけの公園に入る事なんて、普通ありえないからだ。

そんな浮浪者たちの視線を心地よく感じながら、私は公園の中央へと進み、

カバンからいくらかのお金を取り出した後、スカートをめくりあげた。



【浮浪者】「お、おい……！ なんだこの女子○生……!?!」

【浮浪者】「いきなりスカート捲り上げたと思ったら……ノーパンじゃねえか!」

【浮浪者】「おいおい、こんなかわいい顔して痴女がよう……へへっ……」

浮浪者たちは私の割れ目をじろじろと凝視する。私は興奮で濡れ、愛液が糸を引き始める。

【私】「二人につき壹万円払いますから、私の子宮に精液を注ぎ込んでくれませんか？」

キスとかハグとか無しで、「コ」におちんちん突っ込んで精液を出すだけですけど」

【浮浪者】「ま、マジかよう……！ こいつ、本物の変態じゃねえか!」

【浮浪者】「金貰ってこんな美少女に中出し出来るとか最高だ！ いいだろう、たっぷり出してやるよ!」

浮浪者の勃起したペニスを見て、私は心の底から女になった喜びを感じていた。

製作

【女騎士の城 ナイト】 <http://knightmaster.kir.jp/>  
<http://pixiv.me/onnnakisi>

【ばぐぼーど】 <http://www.pixiv.net/member.php?id=11419948>

当作品は【東方プロジェクト】の三次創作です。

今回の作品の構想に、【もし小悪魔になれば】【もし十六夜咲夜になれば】  
にご参加頂いた【ばぐぼーど】さんに参加して頂きました。

（代表作：【冷やして癒して♪ 彼女はぐうたら雪女】 エンターブレイン オシリス文庫）



当作品の素材には【きまぐれアフター】様、【キュキュキュのQ】様、【ウエストサイド】様、  
【シアンのゆりかご】様、【汚素材屋】様、のフリー素材集を使用しております。  
また、当作品にある全ての画像の無断転載を禁止いたします。



それでは、最後までご覧頂きありがとうございました。  
またキャラを変えてTSF物を作る予定ですので、  
どうぞよろしくお願いたします。

2016年10月 女騎士の城

